

第12回バトル仮面舞踏会縦書き版作品

01	「no title」 ignored.....	2
02	「博士と助手」駱駝家清兵衛.....	24
03	「夢図書」わんぱく.....	26
04	「遠 距 離 恋愛」ポニーテ・L・ウマオスキー.....	28
05	「のワの」ホットスープパラノイア.....	30
06	「夜遊び」紗麗人.....	32
07	「桜く染井吉野」江戸彼岸.....	34
08	「二人の酒場」テカテカ.....	36
09	「怪盗サンタXークロス」アニマルまにあ.....	38
10	「墓標」継江 憩.....	41
11	「真実」歌舞伎丸.....	43
12	「年忘れ」かいうえの.....	44
13	「限界疾走！」三郎.....	47
14	「ぬる☆はち〜Null(endless)8〜」西尾青菜.....	48
15	「橋の上」バラゴン.....	51
16	「エニグマ変奏曲」渡り廊下走り隊.....	53
17	「メールが届きました。」Mr.ドリト・スミス.....	55
18	「無冠の剣」空腹の亡霊.....	57
19	「ザ・ドッグファイト ―史上最至近―」紅の鬼姫.....	59
20	「取引と由来」ムツソリーニ下等.....	61
21	「鬼門の守護者」黄金蝙蝠.....	63
22	「死際の数式」9+11.....	65
23	「交差点」ちゃんどらー.....	67

24	「事件」たぬ吉.....	69
25	「シルバー・コスモ」袖胡椒塩ラーメン.....	71
26	「Life is...」イエローサブマリン.....	73
27	「浮気なんて、絶対許さない」トマトマスクル.....	75

■参加者（五十音順） 敬称略

石川順一、うなぎ、越冬こあら、ガビガビ、ガミ、蔵螢、ごんぱち、サ
ンソン、塩カルビ、シャケ弁、JACK、白熊 竜胆、しょうた、粹鏡、太郎
丸、DAN、ちまみい、電メ、鳥野新、七人、花屋まと。hidesuke、ひ
ねもすのたり、まったり茶子、水市、ゆきのしん、(：3)U

全27作品

A4版用紙78枚相当

※ 各作品の著作権は、それぞれの作品の作者に帰属します。無断転載お
よび転用をかく禁じます。

※ 印刷上の注意

一 作目「no title」は23ページ続きます。内容をよく読み、印刷する
かどうか、ご判断ください。

01 「no title」

【パートA】

ignored

……ん、んう……ふあ……ああく。あれ？ えーつと……、ううー……
うわー、パソコン、つけっパだったか。
まいったな……。

しかもスゲー中途ハンパな時間だよ。ふう……。

あーつくっつそー、かったるいな……、うわ、脂ギットギトだよ。
チツ……うるせーなあ。ヤベえ、TVもついていたか。

……っ？ え、なに言ってるの？ 11月19日？ 今日って12……
……13日だろ？ ちよ、ちよっとまで！
そ、そうだ、ケータイ、ケータイだ！！

……あ。

マジかよ、マジで19日だよ。一週間……？ 一週間たっている？
おいおいおいおい、どーゆーこと！？

ん？ アレ？？

……一週間、着信……ゼロ！？

メール、メール……メールも……ゼロ……。

あ、パソコン。……こつちもか。リアクション、ナシかよ……。

……なんだ、コレ！？ ちくしょう、ふざけんな！！ ……ちつ。

あー腹へッタ……か？

いやソレ、気のせいだ。そんなこと、ないや。

そもそも、オレって何だ？

アレ？ ココって、何だ？？

何かあったのか？ オレって……存在、あったか？

あってもなくてもどっちでもいいか。

誰も見ていないし、反応もないし。存在自体、気づかれていないみたいだし。

いつしゅうかん？ そんな時間、いつしゅんだってもう関係ないか。そんなの、はじめからきつとナンでもない。

アルとかナイとかでなくて、ニンシキサレテイナイということなのか。ONとかOFFだけのデンキシンゴウだって、OFFがアルのは、ONというニンシキがあるカラデアッテ……

……
| ……
01100101010111110000001011001011000101110001101101001111001001110
00101110110111000000110111000111111000000000000000000000000000
00
00
00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000
00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000
00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000
00 0

02 「博士と助手」

駱駝家清兵衛

【パートA】

「ハカセ」

「なつなあんんと、助手の分際でワシに『穿かせエ』とは失敬千万。穿きたいなら自分でお穿きになりなさい」

「い、いいえ、そうではないのです。『ハカセ』と助手である私は博士をお呼びしたのです。お解り頂けますか、ハ・カ・セ」

「なんだ、そうであったか。藪から棒に『穿かせろ』と言われたのかと思つたよ。で、何か用か、助手よ」

「はい。昨晚、徹夜で夢を見まして、その中でタイムマシンの作り方を思いつきました。」

「おおお、例のドクがドロリアンで発明したタイムキャパシターのパクリを思いつきましたか。それは、助手ながら天晴れ至極。さっそく学会で発表しましょう」

「い、いいえ、その、正確には仕組みそのものを発明したわけではなく、仕組みを発明する方法を発明したと言うか、なんと言うか……」

「いやいや、何でも良いです。学会で発表しましょう」

「い、いいえ、その前に博士にお話しして、論理的に間違いの無いことを確認して頂きたいのですが」

「あああ、だめだめ、ワシは博士だからといって、難しい理論は理解できません。ワシは難しい理論の無いほうの博士じゃからして」

「い、いいえ、そう難しい仕組みではないんです」

…

「いやいや、それでもきつと解らんから。大丈夫。まずは、学会に発表しましょう。そうすれば、科学雑誌で特集されて、解説本が出て、うまくすれば『まんがでわかる』シリーズになるかも知れない。いや、なるに違いない。ワシは、そうなったところで、ビジュアル的に理解するから。ものは順序じゃ。学会に発表しましょう。共同研究ということで、ワシの名前も付けて、大々的に発表しましょう」

「なつ、なんと、ああ、もう、何でもいいから言っちゃいますけど、タイムマシンの仕組みというのは、つまり、私と博士が今『タイムマシンを作ろう』と決意して、同時に『タイムマシンが完成したら、製作を決意した時点（過去）に舞い戻って、自分たちにタイムマシンの作り方を伝授しよう』と誓うのです。すると、たちまち目前にタイムマシンが現れて、中から出てきた未来の私たちが、作り方を教えてくれる。という寸法です。如何でしょう」

「わああ、難しい。良く解らんが、そうするなら、未来から『まんがでわかる』も持って来てもらいましょう」

「あああ、だめだこりゃ」

と助手があきれた瞬間、兩名の前に閃光が走り、白亜の巨大球形マシンが現れた。

「わわわ、なんじゃこりゃああああ」

(つづく)

「死んでるぞ、助手」

バックリ割れた白亜の巨大球形マシンの内部には、年老いた博士と助手が運転席に四点ベルトで括られたまま、生き絶えていた。そして、助手の膝には助手によく似た少年が一人、こちらも生き絶えていた。

「助手よ、つまり、これは、ど、どういふことだ」

「はあ、きつと、これは、タイムマシンを作り上げた私たちの世紀の実験が、失敗に終わったということです。私の膝の上にいるのは、私の孫……うううう、可哀想に……」

「な、なんと、折角の発明は失敗に終わったか。ワシらの人生もここまでか。まさか過去で死ぬとはなあ。しかし、死んでるワシはワシに違いないが、それを見るこのワシは、誰じゃ」

「うううう。ハカセ、粗忽長屋やつてる場合じゃありませんよ。孫まで巻き添えにするなんて……きつと、未来の私が乗せたんですね……、過信して実験段階のタイムマシンに孫を乗せたりしては、いけない。決して。孫はの・せ・な・い」

「ややや、助手よ、子どもが消えたぞ」

「えつ、あつ本当だ。そうか、私が今、孫は乗せないと強く決意したので、未来の私が孫を乗せるのを止めたんだ。現在の私の思考によって、未来の道筋が変化し、この現代は、私が、私の孫を同乗させない未来との結合を果たしたんだ」

「助手よ、何を言っているのか良くわからんが、しっかりしろ。しかし、この未来ワシと未来助手の葬式を出してやりたいが、金がない。しょうがない。未来ワシに『かんかんのう』でも踊らせるか……。おい、助手、どうじゃ、あつこりゃ、こりゃ、かんかんのう、きゅうれんすう」

「死んで、ますね、ハカセ」

【パートB】

待って下さい」

「うるさいとは何だ。助手の分際で、生意気な。そんな態度なら、分け前はやらん」

博士は未来博士を担いで踊りながら退場。

「おおお、そうか。わかったぞ。最初に出来たタイムマシンには乗らず、改良してから乗ることを今、決意すれば、良いんだ」

助手が強く頷くと、白亜のマシンが消えた。そして、緑色の小型マシンが現れた。

「おおお、これぞ正しく、改良型タイムマシン。ようこそ、過去へ」

バックリ開いたその操縦席には、博士が笑って乗っていた。そして、その右手のレーザー銃が放った光線で、助手はあっけなく撃ち抜かれてしまった。

「ふふふ、これぞまさしく漁夫之利じゃて」

勝ち誇った博士は、しかし、次の瞬間、消えた。

03 「夢凶書」

【パートA】

泰人はひとえ……し……ねん生きた……です——

わんぱく

星無き月夜。剥き出しな神秘はナキタクなる。

風なき空を支配するワタシ。

月明かりが、丸みの帯びた甲獣の影を膨張させる。甲獣——すり鉢状の厚き壁。内部は清い水が湛えた湖がある。

ワタシは幾万の細く熱い矢。哀しみ満ちた湖に刺さっては溶けてゆく。

泰人はサ……トバを読みにいったんです——

ドコ……て？ ゆめとしよ……——

身も心も尽き、あの、マグマな感情は静謐な空気にも慰められて嘘のように醒めて夢の残滓な余韻に変わる。

ああ、熱き感情が降る。

すこし経てばひとつまみの余韻に変わる青白き銀の矢が降る。

湖畔には長方形を立てた打放しコンクリートの建物が湖を囲み円をなしている。大窓を這えば、整然と並ぶ本棚に本、本、本。みなそこに似た深き静かな場所で黒い細流なワタシが本棚を流れる。拍動無き体の何も運ぶことない血管である。だが「死」の色ではない。幾本の細流が重なっては離れ、幾万の情熱のかけらが忘却の記憶をくすくる。

悲しくはない彼等の記憶（本）のように。幾度も寄せては砂地に消える夢心地な余韻が浅い夢のごとく訪れるのだから。

甲獣の住処には不毛な砂地だけがある。風も生物もなし。生も死もなく建物や湖面を打つ密やかなワタシの音だけが聴こえる。

「仁絵は俺の本読んでくれますか？」

湖を囲む沈黙の巨人達。足元から腰くらいまでは本が置かれ、角張った頭には目のような丸窓が等間隔にあり人工的な光の筋がいくつも漏れている。

この声は泰人だ。それだけはわかる。他のことはすぐに忘れてしまうけれど。

いえと頷く、白を基調にしたシンプルな調度品の手狭な部屋に佇む少女。漆黒のワンピースを纏った少女はどこか高圧的で妙な落ち着きがある。

「咎の清算のひとつとして彼女は短い人生を装幀なさいました。あなたの場合は記憶の一部を失っていただきます。それが此処で本を借りる代償でありますので」

丸窓に面した机に向かう泰人は桜色の本を閉じた。

振り向き、嫌悪感剥き出しの泰人に少女は続けた。

「ご確認ですが、一番大切な人との記憶」を思い出してください。記憶を記録にいたしますので」

「ああ……そうでした」

泰人はそれだけ言うと向き直り、三度読んだ本に目を落とした。

*

第二部

私は本気で人を愛すことはできませんでした――

【パートB】

清潔で角張った建物に辛くさいツラオにツラ子。

泰人の生の証明は吊されたバックから規則正しく落ちるしずくだけ。

ぐっちやべっちな声共がモルタルの床にべっとねっちよとスリッパちゃんや革靴様に塗り広げられているのが雑多な音に混ざって聴こえる。

お安らかに。裏切りプリンス――

眠る手に落ちるのは不規則な熱いワタシ。

スツールに座る私。泣いているウスゲシヨコ。

スツールに座る顔も姿も白男。まじめぶったセイキナシオ。

「泰人は最後の言葉を読みに行ったんです。何処につて？ 『夢図書』と聞いてます」

白男を背にして骨張った手で泰人の手を握る私。ひっそひっそと泣いてばかりいる。

「十年です。彼は一日一冊読んでました。一度だけ行けるんだそうです」

えいようパツクさアンよオ、あなたが栄養を運ぶなら、ワタシはいったいなんだろねン。

脈打つ肌に着つ梢ないやわらかい林。だあくり、と打つその鼓動に殺意が生まれる。

すこし開けた窓から夜風が入り込み、淀みを掻く。泰人の前髪を遊ぶ。月が出ているのが薄いカーテン越しに窺い知れるが、漏れ出す力はない。

「仁絵さんは事故死でした。いえ、加害者です。あつというまで、だから彼は……」

ダカラカレハミレンタラオ――

数時間後。

ヒユツ、とやわらか木立がすこしばかり立ち上がる。

おやまあ。

ミレンタラオのお目覚めですか。

薄目の彼。口の端で笑い、焦点の合わない目が宙をさまよう。

「ええ、そうです。普段は眠剤を飲みませんよ」

彼が目覚める。

と、同時にひとつの景色と感情が流れ込んだ。みなそのような心持ち。

瞬きのたびに見える曖昧な景色。映し出される夢の残滓を見つめるのはワタシと彼のふたりだけ。なぜだろう。なんでか映像の輪郭が曖昧になる

うとも幸福だと思う。星無き月夜に桜色の表紙、それと細い銀の矢。幸福

な余韻の後、スクリーンが真横に切れて光が差し込む――

「おは……うユキ」

私は数秒の戸惑いを見せた後、微笑んでおはようと言った。

ワタシが爪跡を舐めたとき、彼が腕を動かした。栄養バックが揺れる。

あいかわらざるぐつちやべつちやとひつそひつそ。

あいかわらざる不規則と規則正しいしずく。ワタシが紅を滲ませてやわ

らかな木立を細流いでゆく。

夜が明けて陽射しが熱を持ち、水たまりに虹が映し出されていた。

【了】

04 「遠距離恋愛」

ポニーテ・L・ウマオスキー

【パートA】

「お前くらいだな、ここに通うの」

ビルの屋上で夜風に当たっていると、不意に肩を抱かれた。繋ぎを身に付けたその男からは、汗と油の臭いが溢れていた。鼻をつまむ。

「おいおい、その態度はあんまりだ」

「おまえ、ふるはいつたか？」

鼻をつまんでもう片方で、肩に乗せられた油まみれの手を払う。ぬめつとした手に嫌悪感を示していると、白の薄布を差し出された。それもまたぬめっている。

「機械屋には感謝してるはずだがなあ」

ようやく離れてくれた男は、ふふんと鼻で笑った。そうして指差す方向には、望遠鏡が幾つか並べられている。

男の笑みの意図は読み取れた。もともと望遠鏡など誰も持ち込んではいなかったのだが、機械屋が一から設計したらしい。

一年に一度帰る以外に、最も故郷に近付ける方法。口にはしたくないが、感謝はしていた。

「愛しの彼女は元氣そうだったか？」

にやにや笑う男に、布を投げ返した。

見えるわけがない。それでも、あの硝子張りの空の向こう、彼女の暮らす星を眺めるのは日課だった。

所持持ちは計画段階でメンバーから弾かれていたが、恋人の有無は問わ

れなかった。恋人持ちがここを賑わせていたのは昔のこと、今では本当に、自分一人。せめて故郷を眺めるくらいはしてもいいではないかと、誰に言うでもなく思った。

「恋愛の難しさは距離の二乗に比例するってのは、本当だな」

閑散とする屋上を眺める。この美しい夜景の下、隣にるのが油臭い男である現実が、なんとも悔しい。

「覆してみろよ、その数式」

男の励ましは嬉しかったが、数学が得意でも、その数式を変えることができないことは分かっていた。

学生時代に仲間内で講義していた恋愛学を思い出しながら、男に携帯端末の画面を見せる。

「おま、まだ送ってないのかよ！」

見せたのは、メールの送信画面。白い本文。今日から私的にメールを送れるようになったのだが、一日一件まで、返信なし等、制限は多く、迷いの元だった。

「さすが恋愛学赤点の男」

呆れる男につられ、ため息を吐く。

「まあでも、数式を変えんのは知識じゃないぜ」

そう胸を指差してくる男に若干引きながら、時刻を確認。追い込まれ、結局は安直な内容に落ち着いてしまった。

七日後の君へ。

「お、どれどれ」

「見るなっ！」

覗き込む男を振り払いながら慌てて打たれたメールは、漆黒の宙へと飛んでいった。

【パートB】

「あら、まだいたのね」

ビルの屋上で夜風に当たっていると、ドアの開く重い音がした。振り返ると同時に、手に持っていたケータイが攫われる。

情報屋の先輩は、画面を見るやいなやしかめっ面だ。

「なに、まだ来てないの」

「そうなんですよ、ダメ彼氏です」

憤慨した勢いでケータイを取り返し、何度目かの新着メール確認を行う。結果はいつだって、新着メールなし。

「あ、それじゃダメよ」

覗き込んでいた先輩は、またしてもケータイをかつさらう。

待っているのは、あの空の遙か彼方にいる恋人からのメール。メールが私的解放されたという話を先輩から聞いて、嬉々として、彼の見える星空の下に通い続けたが、この様だ。

「会社の個人掲示板に送られるのよ。言ってなかった？」

初耳だ。確かに言われてみれば、公共の通信会社に送られているわけではない。

先輩に彼の名前とパスワードを尋ねられ、メモ帳を開いた。個人掲示板は安否の確認用に創設されたらしく、親族や、親しい人だけに、自己判断でパスワードが教えられた。

親族。そのことを思い出し、急に顔が熱くなる。

「彼の両親も、パスワード知ってるわよね」

「そりゃねえ、もちろん」

「み、見られちゃうの？」

ケータイを操作する先輩の手が止まる。そして、赤くなっているであろう顔を凝視され。

「ほほう、ラブメールの自信があるんだ？」
にたつと笑われた。

「ち、ちが」

違わなくはない。けれど家族宛てのメールの可能性もあるわけで。恋愛学赤点の男だ。大いにありえる。

「返して下さい！」

お腹を抱えて高笑いする先輩からケータイを返してもらい、覗く。受信箱、新着メール、一件。

来た。来た来た来た！

覗く気であろう先輩にバレないように、小さくガッツポーズを決める。

ラブメールとまでは言わない。ご両親を気にするなどは言わない。それでも、それでもやっぱり、最初は私であつてほしい。

息を飲む。

本文の一行目。

七日後の君……。

「お、どれどれ」

「見るなあっ！」

いつの間にか背後に回り込んでいた先輩に覗かれながらも、君、という単語に胸が跳ねた。

その感動の、なんと脆いことか。

「あなたの彼、甘えたがりなのね」

照れと怒りが相俟って、顔面は蒸気が出そうなほど熱くなる。震える手で投げたケータイが、漆黒の宙へ飛んでいった。

七日後の君も
あいちてる

05 「ワ」の「ワ」

ホットスーパパラノイア

【パートA】

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんはロリコンで、おばあさんはブラコンでした。

ある日のこと、おじいさんが山へ竹取りに行ったところ、竹の中に光る竹があるではありませんか。

おじいさんはティンとききました。

妙な確信がありました。この光る竹の中には世にも美しい幼女が入っていて、取り出したらもう成長して、中央のお偉方が求婚にきてしまうような気がする。それじゃダメだ。ワシはちっこくて目に入れても痛くないようないたいたいけな娘が好きなんじゃ。ランドセルとか背負わせて慈しむ目で鑑賞するんじゃ。とか、なんとか。

おじいさんは考えました。

竹から出すから大きく育ってしまう、ならば竹から出さなければいい！
 名案！ とばかりにおじいさんは名刀・雨後筈（ナタ）を取り出し、妙
 技・悟り乱舞を繰り出す。説明しよう！ 悟り乱舞とは、悟り（小五ロリ）
 の力が空気中に満ち、対象物に傷を付けることなく無駄な部分だけを剥ぎ
 取るという究極の活人剣なのである！

「また、つまらぬものを切ってしまった」

おじいさんは、光る竹の、光っている節の部分だけを綺麗に切り取った
 のでした。しかも、それだけではなく、竹の表面が極限まで削られ、竹の
 内側が外から透けて見えるではありませんか。

おじいさんはホクホク満足顔。

光る竹を小脇に抱え、急いで家へと帰りました。

さて、困ったのは竹の中の小人、カグヤです。

彼女の算段では、人間の世界でセレブたちをたぶらかし、極上の美男子
 たちの精気をすすり、つやつやになったところで彼女の故郷であるところ
 の月に帰る予定だったのです。

しかし、まさか竹から取り出されず、そのまま籠の鳥にされてしまっ
 んて！

ある夜、カグヤはおじいさん取引を持ちかけました。

「おじいさん、おじいさん。おじいさんの願いを何でもひとつだけかなえ
 てあげますので、ここから出してください」

「不可能な願いでもか！？」

「不可能などございません」

「ならば、ワシが生まれ変わったら十二人の妹たちに囲まれたキャッキヤ

ウフフな生活をくれ！」

「お安い御用です。ふふふ、おじいさんも悪ですわねえ」

「お主もよのう」

さて、このやりとりをこっそり聞いていたおばあさんは面白くありませ
 ん。そこでおばあさんは恐ろしい呪いをかけたのです。

【パートB】

明日あした、未来のおはなし。

平々凡々たる大学生活を送っていた彼は、一通の手紙によって世田谷に
 ある広大なお屋敷に呼び出されました。

その手紙を手にしたとき、遠い過去の記憶が突然蘇ったのです。

「……ついぞ、我が野望の叶うとき！」

そうです、彼は、昔々、カグヤと取引をしたおじいさんの生まれ変わ
 りだったのです。

つまり、この門の向こうには十二人のかわいい妹たちとのバラ色の日々
 が待ち構えているというわけなのです。

いざ、扉よひらかれん！

夏の日差しが照りつける邸内。

青々と茂った芝生をシャッシャッシャとスプリンクラーが湿らせる。

その芝生の上を「アハハハ」「キャッキヤツ」と言いながら駆け抜けるま

だ幼い肢体。

スラリと細く伸びた白い足、お人形のような大きな瞳、半ズボン。
……半ズボン？

あれは男の子じゃないか！

いや、きっと男の子『も』いるんだろう。

そう、自分に言い聞かせ先を目指します。

気を取りなおして屋敷を目指します。広い庭を抜け、屋敷にたどり着くと、執事と思わしき初老の男性が、扉の前で待ち構えていました。

「お待ちしておりました。皆様おそろいでお待ちでございます」

重く、大きな扉が、ゆっくりと、開く。

すると、中から愛しの十二人の妹達が……

「あーにきいーにきいー」

ドドドドドと音を立てて、男達が駆け寄ってくるではありませんか。

スポーツマンタイプ、優等生タイプ、のんびりタイプ、男の娘タイプなどなど、いろいろな性格（のようにみえる）弟達に詰め寄せられます。

「お、おい、セバスチャン」

「なんでございましょう」

「俺の妹達はどこに？」

「はて、旦那様は男だけの十三人兄弟でございしますが？」

そうなのです！ カグヤとの取引を面白くないと妬んだおばあさんの呪いだったのです！

その呪いとは「おじいさんの家系には、男しか生まれぬ」というもの。さらに「その兄弟は皆、長兄のことが好き好き大好き超愛してる」という恐ろしいものだったのです。

しかも、十二人の弟たちの大半が第二次性徴を迎え、性の目覚めが激しいお年頃。

「お兄様……あの、俺の悩み聞いてくれませんか？」

「あの、お兄さんのことを考えると身体がむずむずして……」

「兄貴、ハッスルしようぜ！」

「やらないか？」

アーツ！！

人生という冒険は続く。

06 「夜遊び」

紗麗人

【パートA】

男は今年、大学のあっせんで就職したが、二カ月ほど前に辞めていて、まだ新しい職も見つかっていない。探す気だっただけでもないみたいだか

ら明日の心配なんていらないでしょう、とこんな時間に恋人に呼びだされることがよくある。本心を言えば行きたくないのが本のだが、断る適当な理由も見つからずにぐだぐだしている、すぐに家を出なければ約束の間に合わない時間になっていて、今から断るのはどうにも気がひける。こういうのを、週に二、三回はやっている。彼はおおむね、そんな男である。

携帯電話のディスプレイで確認すると、23:16を表示していた。電車の中はけっこう混雑していたが、まだほとんど乗客の居ないうちから乗っていた男は座席で足を組み、なんとはなしに周りを見回した。隣ではずいぶん前から髪の毛の茶色い若い女が化粧を直していて、目の前には革靴をぶら下げたサラリーマンがミントガムを噛んでいる。したたか酔酩した六十代くらいの男が向いのドアのすぐ横で眠っているが、皆迷惑そうな顔をしながらも、誰かが注意するのを待っているだけのようなだった（むろん彼もそのうちの一人である）。ぼそぼそとアナウンスが入る。電車はもう、国立を過ぎたらしい。

彼女とは大学のころ学科が同じというだけの間柄だったから、なぜ今こんな状況になっているのか、男にはよく思い出せなかった。親指の爪を眺め、そろそろ切らなければいけない、などと考えていると、電車は歯ざしりをして停まった。人垣を押しつけて、何人かの乗客の後ろについていく。ドアを出るとき、ぬるっとした生暖かいものが体を撫ぜるような、どうにもおかしい感覚があった。それは温めたミルクに張った膜のような感触で、ホームに降り立つとなくなってしまった。思わず振り向くと、電車は妙に急いでいる感じで、すぐに去っていった。強烈な列車風を残して。

改札を出ると街灯の量が目をうるませた。眠り込むように力なく首を傾げ、ビジジャンの看板に視線を向ける。

〈BAR デンドロビウム〉

彼女はまだ来ていないようだった。口ひげのマスターが「何にしましよう」というので、男は「いつものを頼むよ」と言った。マスターの目があやしく光った。

【パートB】

マスターは片手に二つずつシェイカーを持ち、舞うように振り始めた。胸騒ぎの腰つきに、男は感嘆の吐息を洩らす。

大道芸人よろしく空中に四つのシェイカーを放り投げ、

「これは……」

しなやかに受ける。

「ジャクリングシェイク！ いつの間にこんな大技を……」

全てのシェイカーを天井近くまで放り投げると、高速回転しながら滞空した。それはスローモーションのようにも、早送りのようにも見えた。時間差で放物線を描きながら、意思を持って手元を目標しているようだった。

「ひとつ！」

一つ目のシェイカーが胸の前まで落ちてきたのを左手で受け、一連の動きを乱さず、シェイカーを小粋にくるりと一回転させ、ミキシンググラスに注ぎこむ。

「ふたつ！」

二つ目のシェイカーを振り向かずに腰の辺りで後ろ手に受け、

「OH！ イチロー！」

そのままぐるりと腕を振り上げ、小指でキャップを弾き滝のように注ぐ。

「みっつ！」

シェイカーを顔の前で両手で掴み、更にシェイク……

シェイク、シェイク、シェイク！

胸騒ぎする程のシェイクに次ぐシェイク！

シェイカーを真ん中から割り開き、液体の塊を乱暴にミキシンググラスに落とす。しかし液体は、まるで飛沫を上げなかった。

「こんな技まで……！ しかし、次に間に合うのか？」

男はマスターの目に、疲労の色を見た気がした。

「よ、よっつ！」

マスターはラストの、やっと天井近くから落下し始めたシェイカー、右手を掲げ……

「取り損ねた！ 言わんこつちやない、まさかここまで来て……」

取り戻そうと手を伸ばすマスターだったが、嘲笑うように指先が弾く。

右手が弾き、それを受けようとした左手がまた弾く。

「もういい！ もう、やめてくれ……」

マスターはシェイカーと不格好なチークを踊り、段々と高さが無くなり始める。このまま行けば、全ては白紙に戻るだろう。しかし……

「ッ！？」

彼の顔は笑っていた。

最後のシェイカーがミキシンググラスに激突する直前、右手でしなやかにそれを握り、握ると同時にキャップが弾け飛び、透き通った液体がミキシンググラスに注がれた。

「演出だったとは……」

そしてゆっくり、赤子をあやすかのように、ミキシンググラスの中身をバースプーンで混ぜる。

「なんと見事な静と動……」

感心していると扉のベルが響き、彼女が入ってきた。マスターはグラスを差し出し「あなたたちにびつたりのカクテルですよ」とほほ笑んだ。

07 「桜、染井吉野」

江戸彼岸

【パートA】

庭に大きな桜の木がある。祖母が生まれた年に植えたという、染井吉野の大木だ。春の朧月夜の影の中、満開の重たげな枝から、次から次へ花弁を散らしている。匂いはないが、夜の冷気が甘酸い香りの様に鼻腔を突く。

『……子供がいる……』

声ともつかない呟きが、重なる花の陰から漏れ出てくる。

『……この下には、子供が埋まっている……』

烏帽子を付けた白髭の翁が、ふわりと地に降り立つ。年毎に長くなる髭は、間もなく足元に届きそうだ。

「……そうか」

縁側で一献傾けていた私は、翁に杯を差し出した。

「まあ、一杯どうだ……これも、最後かもしれないから」

狩衣の袂を一度翻し、翁は私の前に立つと杯を受け取った。注いだ酒に、ぼんやりとした月が映る。翁はしばらくそれを見詰めていたが、やがてくつと顎を上げて飲み干した。閉じた目が再び私を見下ろし、金の眼差しが見開かれる。

『末期の酒じゃ』

「そうなのか……？」

私は眉をひそめて、翁を見詰めた。先程は冗談めかして言ったものだが、今年ついにその時が来た事を悟る。

『舞を舞おうぞ』

「門前の小僧か」

私の家は神楽舞を伝える家系で、ついこの間も桜の宴が催され、この桜の元でひとしきり舞が披露されていた。私が笑うと、まあ見ておれと扇を広げた。

皷だらけの口元から、朗々とした声が発せられる。聞いた事もない謡だった。しかし歌調は明るく、寿ぎ歌であることは間違いないかった。長くこの家に世話になったとの謝意と、この先の弥栄を願う祈りだが、湿った大気の中をゆるりと流れて行く。

扇が滞る気を動かし、返る袂が風を起こす。それを受けて、舞い散る桜が乱れて広がり、木よりも高く昇って行く。踏みしだく足元は芝地であったが、空を震わす床木の音が響き渡った。

謡の最後の声音に重なり、どこからかの笛の音が長く尾を引き、舞いは終わった。

扇を掲げ、両腕を開いたままの姿が、次第に霞んでいく。

『そなたに出会えたのは、望外の喜びじゃ』

微かに吹いてきた風に、地に落ちた花卉が小さく舞った。

『……子供が埋まっている……』

最後の呟きと共に、翁の姿は消えた。

花の見事さに比べ、その年の葉の付き方はとみに悪かった。春先になっても芽吹くことなく、枯死したと植木屋が告げた。

桜の木は切り倒され、その根元に何も埋まっていなかった。

【パートB】

庭に小さな桜の木がある。孫娘が生まれた年に植えた、染井吉野の幼木だ。春の朧月夜の影の中、可愛らしい花房から、幾つか花卉がこぼれ落ちている。側にあつた古木が春先に切り倒され、ぼっかりと空いた広い空間に、枝が戸惑った様に震えていた。

『……子供がいるの……』

細い小さな声が、おずおずと囁いて来る。

『……この下に埋まっているよ』

蓬髪に冠頭衣を着た童子が、そろりと顔を覗かせた。

「やあ、初めまして」

私は微笑むと手招きした。

「ここへきて、甘酒でも飲むかい？」

はにかんだ表情で、童子は近づいてきた。甘酒の入った小さな湯呑を渡すと、不思議そうに見つめてそつと口を付けた。

『……おいしい』

嬉しそうな吐息を漏らして、円らな瞳を上げる。

『あれも一緒に埋まっているよ』

「あれ……？」

『あの子が背負っていたのと同じ物……ええと……ら、らんどせる？』

この春小学校へ入学する孫娘が、先日嬉しさのあまりランドセルを背負って、庭先を駆け回ったのだ。私は眉をひそめた。

「子供とランドセルが一緒に埋まっているのか……？」

童子は頷いた。

翌日植木屋へ電話をして、桜の苗木をどこの畑で栽培したかを訊いた。

染井吉野は、大島桜の台木に接ぎ木をして繁殖する。この幼木も古木の接ぎ穂を、植木屋の畑にある台木に活着したものだ。

過去の新聞を調べると、七年前、この畑の近くで小学生が行方不明になる事件があった。未だに解決の目処は立っておらず、両親が新たな情報に謝礼金を出している。もとより金など欲しくはなく、こちらも詳しい事情は言えないので、とにかく大島桜の畑を掘り返してはと、匿名で知らせた。

後日、遺体発見の報道があった。

私が出会う染井吉野は、根元に子どもが埋まっていると皆一様に言う。初めは不思議だったが、近頃クローンゆえの共通した記憶ではないかと思うようになった。最初の染井吉野の木の下に、子供が埋まっていたのかもしれないと。

しかし、ランドセルは初めて聞く話だった。

我が家の桜はこの先、ランドセルと共に埋められた子供の話をするのかも。次はこの話を聞く者は、さぞ面喰うだろうとおかしくなった。

桜の童子は庭の中を思い切り冒険したせいも、疲れ果てて眠っている。消えゆく姿を見ながら、あと幾度出会えるかとぼんやり思った。

月も傾き、今年の桜の季節も終わろうとしていた。

08 「二人の酒場」

テカテカ

【パートA】

「おおう」

居酒屋の暖簾を潜って来たのは薄くなった白髪。

「おー、今日もまだ生きてたかスミさん」

迎え入れた毒舌はカウンター席で客と野球観戦をしていた店長。

「スミさん今日も調子良さそうじゃない」

「おおう」

俺が驚いたのは、真理子までこの老人と顔見知りだったって事。

「常連さん？」

小声で彼女に聞いてみる。

「うん、そーだよ。もー、いい歳して毎日飲み歩いてんだよねー」

と言うことは彼女も毎日飲み歩いているって事だろうか。一軒目で酔いが回ったのか、普段の大人しい雰囲気から想像も出来ないほどに別人。

「ワーロンハイおかわりー」

「アイヨー」

カウンターの途中で忙しなく動いている中国人だかが答える。

『サア九回裏ワンナウト一塁二塁。ピッチャー振りかぶって第二球……投げた！』

「なー！ なんだよお」

店長を見れば、カウンターに座る客と一緒にあって、野次を飛ばしている。

洒落たバーに真理子を誘い、いいムードだったところで二軒目。彼女の馴染みの店だからと連れて来られたのが、この昭和感溢れる焼き鳥屋だった。バイト仲間の彼女を落とす気満々だった俺は、なんだか肩透かしを食らった気分だ。

「そろそろ俺、終電の時間が……」

「えー、明日休みなんだし、朝まで飲もうよー」

「あ、朝までつて、こんなところで朝までやつてる店なんか、あんのかよ？」

「ウチ来ていいよー、ボトルあるし」

『サアツーアウト満塁でこの場面。ツーツーからの第五球……投げた！』

打った！ 大きい大きいホームラン！

「うおおお！」

この店で一番煩いのは店長だったが、店長以上に俺の心は狂喜乱舞。まさに逆転サヨナラだった。

「お前、意外と飲むんだな」

「なーによ、悪い？」

性格も変わるようだ。覚束ない足取りの真理子の肩を担いで、住宅街の街灯は点々とした道しるべ。酔った勢いで彼女のアパートへ雪崩れ込むこ

のパターンに、今夜は貰ったと確信した。

【パートB】

よく磨かれたカウンターテーブルの上、カクテルグラスの中では輝く気泡がチェリーと戯れている。

バーで飲むのもゆっくり話すにはいいしキライじゃないけど、私は賑やかな方が好きだった。今週は勝彦とばかり飲んでた。最初の内は面白かった彼の話も最近は武勇伝ばかりで、だんだんつまんなくなってきた。

「なあ、そろそろ出ないか？」

「えー、もお？」

なんだか飲み足りない気分だったけど、奢って貰ってる身としては仕方ない。私は洪々席を立った。

店を出れば冷え込んだ空気。やがて勘定を済ませた勝彦が顔を出す。

「おまたせ」

「もう帰るの？ それとも二軒目行く？」

夜空は暗く街のネオンは明るくて、まだ星も月も見えない。

「いや、後はお前んちで飲もうと思って」

「えっ、ウチ？」

「いいだろ？ 別に」

なんだそれ。私から誘うならともかく、オマエが勝手に決めんなよ。

「今日は駄目だよ、散らかってるし」

「そんなん、俺が片付けんの手伝ってやるよ」

思わず二度見すれば満面のスマイル。啞然とする私。

「いや、なんで勝彦が部屋片付けんの手伝わなきゃならないのよ」

「はは、遠慮すんなよ」

ナニサマのつもりなんだろう。と思っていたら、肩に手を回して顔を近づけて来た。

「ちよっ、まっ……」

寸での所かわした唇からアルコール臭。

「いっ、一回エッチしたからって彼氏ツラしないでよ！」

「え？ だって俺たち、付き合ってたんじゃない？」

「バツカじゃない？ ただのトモダチなんですけど」

がっかりだ。勝彦なら私の飲み友達になつてくれると思ったのに。きつとコイツは自意識過剰な男だったんだ。

「おおー」

「おー、今日もまだ生きてたか」

店長はカウンターから立ち上がってスミさんを迎える。やっぱり私はこの小汚い居酒屋の方が落ち着く。

「今日も調子良さそうじゃない、スミさん」

「おおー」

赤ら顔に声を掛ければいつもの皺だらけな笑顔。

「そう言えばマリちゃん、この前のイケメンはどうした？」

店長がグラス片手に私の隣に座る。本当に仕事しない人だ。

「とんだカンチガイ男だったから、捨てちゃった」

「やるねえ。やっぱマリちゃんはタダ者じゃないねえ」

「それより店長、いい男紹介してよー」

「そんじや、バイト募集の隣に彼氏募集広告でも貼り出しておくか、ハハ」

居酒屋の夜は、やいのやいの暮れていった。

09 「怪盗サンタXークロス」

アニマルまにあ

【パートA】

複数のサーチライトに照らされて、隣家の屋根に一つの影が浮かび上がる。雪白のマスクで素顔を隠す赤いタキシードの男。豪華な庭園に配備された警官隊は口々に彼の名を叫んだ。

怪盗、サンタX。

そう、今この場に彼の名を知らぬ者はいない。クリスマスカードに見立てた犯行予告を標的に送りつけ、予告通りに彼は現れた。今夜、彼が選んだ標的は、某特例財団法人協会大使チャグネス・アン。彼女が世界中で蒐集した高価な調度品の数々だ。

「ああ、本当に現れるなんて……」

「この警備網を抜けて、お宅に侵入することは不可能です」

青ざめるチャグネスの隣に立つ男の名は、仲井達也。警官隊を指揮する若き刑事だ。彼は拡声器を片手にサンタXを挑発する。

「やい！馬鹿みたいな格好して突っ立ってないで、さっさと降りてきたらどうだ！」

サンタXがマントをなびかせながら、夜の空を滑翔し、屋根から庭園へと舞い降りた。

「ニシシシ……」

自らを囲う警官隊を見回し、サンタXは不敵に微笑んだ。飛びかかる警官の両腕をすり抜け、頭の上を飛び越し、股の間を這って回避する。二十名を超える警官隊は彼に触れる事すら叶わず、脱兎の勢いに翻弄されるばかり。

数十分に及ぶ鬼ごっこの末、ようやく仲井がサンタXの片足を捕らえた瞬間だった。耳を覆いたくなる衝撃音。二階のステンドグラスを突き破って、サイドカー付きのバイクが現れた。乗っているのは、滴るような赤のライダースーツを身に纏うチャグネス・アン。チャグネスが顔の皮を破り捨てると、皮の下から白マスクを被った女サンタXが現れる。

「ああ！」

仲井はすぐに理解した。初めから……恐らく仲井達が警備する以前から、奴は標的に成りすましていたのだ。

白い袋を背に担いだ女サンタXは、バイクのアクセルを吹かし、男サンタXに向かって走り出した。迫るバイクに気圧されて、仲井が思わず手を放す。すかさず、男サンタXがサイドカーに飛び乗った。

「ニシツ！んじゃ、警察の皆さん！メリークリスマス！」

二人のサンタXが、手を振って走り去る。再び閑静な高級住宅街にそぐわぬ豪快な爆音が、辺りに響き渡った。

「ぬああ……ちきしょう！」

腰を抜かした仲井は、庭園に茂る芝生を引き抜くと、忌々しげに千切り捨てた。

【パートB】

夜半過ぎ——。簀巻きにされた本物のチャグネス・アンがクローゼットの奥で発見、保護された。バイクで逃走した二人組は警察の追跡も空しく、依然として行方知れずのまま、夜が明けた。

そして……今日は楽しいクリスマス。しかし仲井は、その1日を山のように積まれた始末書とともに過ごすことになった。日付が変わる数分前、ようやくデスクから解放される。半値以下に値下がりしたクリスマスケーキ

キを土産に帰宅したのは、粉雪舞う深夜一時過ぎであった。

「お兄ちゃん、遅ーい！」

妹が寝ずに待っていた。彼女の名は仲井朋子。未だに赤ちゃんコウノトリ伝説を信じて疑わない天然記念物級の女子高生である。

「その傷、どしたの？」

朋子は、手首に包帯を巻き、顔は絆創膏だらけ、足には大きな青痣を作っていた。

「えと……転んじやった！……ニシッ！」

「マジかよ？ 車に轢かれたってレベルだろ、それ」

居間では父親が酔い潰れていた。彼の名は仲井徳夫。世界を股に掛ける古美術商だったのは過去の話。現在はアルコール中毒で、職を失った筋金入りの穀潰し。達也の稼ぎだけで成り立つ仲井家の家計を揺るがす脅威ではない。彼もまた痛々しい傷を負っていた。

「ニシシ……おう達也あ……おかえりんさい」

「親父どうしたの、それ」

「ちょっとあれだよ！ 転んじやったんだよ！」

「二人とも……何やってんの」

達也が買ってきたケーキを見せると、二人は目を輝かせて歓声を上げた。

「兄ちゃんがシャワー浴びてくるまで、開けんじゃねえぞ！ 絶対にな！」

達也はネクタイを外し、スーツを脱ぎながら、二人に念を押したが、達也の姿が見えなくなると、すかさずケーキの箱は開封された。

「可愛いケーキだね……お父さん」

「ニシシ……このお家の部分は俺の陣地な」

「ずるーい、じゃあサンタさんの部分は全部、朋子のね」

「おおい、そしたら達也の分が殆ど無くなっ……まあ、いいか」

達也は無邪気に喜ぶ二人の姿を覗いて、満足そうに微笑むと脱衣場の戸を開けた。

深夜の報道番組は、珍しく明るいニュースを伝えていた。とある孤児院に匿名でクリスマスプレゼントが届いたのだという。玩具を手にした子供達の嬉しそうな笑顔が画面に映し出されると、それを見た親子は顔を見合わせて、ニシシシと笑った。

―終―

10 「墓標」

継江 憩

【パートA】

無常な太陽は地平線に身を隠そうとしつつ、最後の未練の輝きを砂漠に投げかけている。時折砂混じりの風が吹き上がり、風紋がキラキラと光りながら姿を変えていく。

俺はこの瞬間の光景が好きだ。

いろいろな国を放浪した挙句、なぜかこの砂漠の案内人に吹き溜まってしまったが、この一瞬にとり憑かれたせいではないかと思うことすらある。テントの設営を終え、後ろを振り返るとまたあの女が砂に水を吸わせていた。

飲み水として持って来ている量はたかが知れている。あの調子でやられたら帰路の飲み水が無くなるのは自明の理だ。何度も注意したのに、あの女は言葉が理解できないのか、聞く耳を持たぬのか、静かに首を振って眼を伏せるのみ。

それにしても、ガイド代として渡されたあの大金は、娼婦でもして稼いだのだろうか。ちらりと見た頭巾の中の顔は、汚れてはいたが彫りの深い

顔立ちで、深い淵を覗き込んだような灰緑の眼が印象的だった。

あの女、日中はテントでやせこけた身体を薄汚いぼろきれにくるんで寝ていたくせに、日が暮れると、俄然元気を取り戻して身振り手振りでもう少し、もう少しとばかり、砂漠に足をめり込ませながらまろび出て行く。無事につれて帰らなければ俺のガイドとしての面子が立たない、ので仕方なく俺も追いかける。

骨を見つけるとひざまずいて、ぶつぶつと何か呟きながらその辺りの砂に水をふりかける。しばらくすると、ため息をついて松明を片手にふらふらと他の骨を捜しに立ち上がる。

食事も取らず、テントに入る気配すら無い。

寝ない気だろうか。冗談じゃない、明日からは長い帰路が待っているというのに。

2年前にこの砂漠で、隣国との大きな戦争があった。海を持つ隣国を狙ってこの国が攻め込んだのだが、隣国も一歩も引かず、この砂漠で大決戦が行われたのだった。数千の人間と騎馬がここで命を失ったが、戦後は巡礼の者が絶えず、人の不幸で食っていくのは気が引けるもののガイドの組合に入っていないもぐりの俺でもなんとか食っていけるほどのおいしい場所だ。

この女もここで大切な人を亡くしたのだろうか。

戦争で天の神の涙が尽きたのか、ここ何年も雨の降らぬこの砂漠は貴重な水を貪欲に吸い込んでいく。

「よせ」

テントに入ってきた女が最後の瓶に手をかけたのを見て、さすがに俺はその手をつかんだ。すると、女は何処に隠し持っていたのか、短刀を引き抜いて俺を睨みつけた。

【パートB】

「水無しで、俺はどうなる」

暫くの沈黙の後、女はそっと水を置き、テントの外の焚き火で木切れに火をつけると、砂漠の深い闇の中に出て行った。

俺も追いかける。

テントからかなり歩いて骨のある場所を見つけると、女は立ち止まり、自らの腕に短刀をつきたてようとした。

俺は慌てて飛び掛ると、腕をねじり上げて短刀を取り上げる。

『邪魔しないで』

女の言葉に俺ははっ、とその顔をまじまじと見つめた。

『お前、隣国の者か』

隣国とは停戦しているものの、いつまた戦端が開かれるかわからない準戦闘状態で、もちろん隣国の人間の入国は許されていない。もし正体がばれれば、無事にすむはずが無く、ここまで来るのには想像を絶する苦勞があつたに違いない。

俺は何年かあの国で暮らしていたことがあり、多少だが言葉を解することができた。

『許婚が待っている』

短刀を渡せとでも言うように、女は俺のほうに手を差し伸べる。

『水が無くなっても、私の血がある……』

もう此処で命を捨てるつもりなのであろうか。

『もう止める。許婚はお前がともに死んで喜ぶとは思わない』

俺が短刀を渡さないと悟るや女は砂漠に身を投げて、何か叫びながら砂を叩き始めた。

どれだけ時が過ぎただろう。

ふと、空を見上げると、今まで天に瞬いていた星が姿を消していた。

「え……」

最初それは、頬を何かに撫でられたようなかすかな感触だった。

いや、気のせいではない。

冷たい銀線が次々と身体に当たり、松明の火がしょぼしょぼと弱まり始めた。

気が付くと女が一点を見つめている。

『ああ……』

視線の先、闇の中にかすかに青い燐光が浮かび上がっていた。

女は砂に足を取られながら、もがくようにしてその場所にたどり着く。

そこには青い光が地面から滲み出すように煌めいていた。

『やっと、見つけた。あなた』

駆け寄り、骨をかき抱く女。

白骨となった手が小さな黒い瓶を握り締め、そこから青い燐光が滴っていた。

女の目から溢れ出す涙。

俺は一度見たことがある、あれは海ほたるの色だ。

隣国の巫女は海ほたるを集め、乾燥させて粉にして祭祀に使うと聞いたことがある。粉は水分を含むと再び青色に発色して、暗闇の中で輝きます。

そしてその粉は、身分の高い巫女のみが使用を許されている、と。

砂漠に染み入る雨。

骨をかき抱く女の嗚咽さえ、砂に吸い込まれていく。

雨はただ、音も無く降り続くのみ。

降り続くのみ。

11 「真実」

【パートA】

歌舞伎丸

甘くまどろむミルクのような夢から少女が目を覚ますと、朝の陽射しがドーム状に作られたステンドグラスの天井から降り注いでいた。変わらないういつもと同じ朝を、少女は迎えた。

「おはよう、朝ご飯ができていますよ」

「おはよう、お兄様」

白いキャンディのような扉から現れたのは少女の大好きな兄。お月様のような髪をフワリと揺らしながら少女に挨拶をし、朝食を促す。

蜂蜜色をしたブロンドを空色のリボンで飾り、今日も少女の、鳥籠のような屋敷で兄と過ごす退屈な日が始まる。

「ねえお兄様、どうして外に出てはいけないの？」

「その質問は何回目？ お前の身体が弱いからだよ。仕方ないじゃないか」少女の身体はとても弱く、外の空気ですぐに体調を悪くする。その少女の世話の為に、兄は少女と同じ気持ちを共有するように、少女と同じよう

に屋敷から外に出ず、何年も一緒に過ごしている。

少女は朝食を済ませ、屋敷の中を探検して退屈を潰す。少女のいつもの行動とし、日課でもある。こうして屋敷の中を巡っている内に、空に星が舞う時間になり、月がほほ笑む。

少女は扉のノブに手をかける。イチゴのような赤い扉を、空のような青い扉を、草原のような緑の扉、菜の花のような黄色い扉を、たくさんの方に彩られた扉を開けて回る。そして、兄には開けてはいけないと言われた、屋敷にある最後の扉、夜のような黒い扉を兄が屋敷の中にある温室の花に水をあげに行っている間に開けた時、気付いたら少女の手は赤く赤く、赤薔薇よりも赤く染まり、黒い部屋の中で大好きな兄が真っ赤になって倒れていた。

「お兄様ああああいやあああああつ二二」

広く兄以外誰もいない屋敷に、一人残された少女の悲鳴が屋敷に響く。

【パートB】

少女が絶望に白い肌を青く染めている時、開いている黒い扉に影が挿した。そこに立つのは少女の前に赤く倒れている筈の兄でした。

「お兄様……？」

「ああ、またやってしまったのだね……」

兄は震える少女を優しく抱きしめ、大丈夫と囁き、首の根本をカチリと押した。その瞬間に少女は機械音と共に空色の瞳を閉じてしまう。

「また作り直そうね」

兄は機械の身体の少女を抱きかかえ、屋敷の扉をくぐり抜けて、さまざま

まな機械音を立てている研究施設へ運ぶ。

少女はとうの昔に、病弱な少女の世話に疲れた兄に殺されてしまったのだ。兄は少女は兄に残されたたった一人の家族であり、生き甲斐でもあったのにその手であやめてしまったことを激しく後悔した。そして兄は亡き両親が残した莫大な遺産で、少女の言葉遣いや仕種、少女自身の記憶を組み込んだアンドロイドを作り、また一緒に過ごすために屋敷を研究施設の中に組み立てて一緒に過ごしていた。

しかし、ある時少女は黒い扉……ただ空っぽなだけの部屋を見て苦しみ始めると兄を襲い、殺そうとした。その部屋は、最後に少女と兄が夜空を見上げた思い出を片付けた部屋であり、兄の後悔の念が詰めた部屋。

少女が兄を襲う度に電源を切り、作り直し、自分と同じアンドロイドを作り、少女が黒い扉を開けても襲ってこないまで少女が繰り返し壊すアンドロイドを作り、また少女が目覚めるという朝を繰り返し返す。

「今度こそ、帰ってきておくれ」

時の止まった少女のために、歳老いた兄は何度もアンドロイド達が繰り返し返す兄妹の幸せそうな朝をいつまでも眺める。

12 「年忘れ」

かいうえの

【パートA】

共有スペースに誘導された阿部幸三は、熱い麦茶を飲みながら、他のグループホーム入居者と一緒に紅白歌合戦を眺め始める。

「……やれやれ」

ハイター臭をさせながら、中村敏明はキッチンで調理を再開する。

「パッド詰め、またやられたねー」

鈴木麻妃がゴミ袋の口を縛る。

「一見、普通の人なんだけどなあ。俳句とか作るし」

阿部はテレビの画面に目を向けながら、指を折って数えている。

「昔の記憶は残ってるもんですよ」

「でもこの前の認定調査、生まれた年も言えてなかったよね。自分の年齢、四十二歳だって」

中村は人参の飾り切りを始める。

「あ、それ、お花？　かわいー」

「献立表通りだと、朝食が殺風景なんで、せめて雑煮ぐらいはね」

「おモチあったつけ？」

中村は食材運搬用の半透明の箱を指さす。

「あ、結構あるね」

紅白歌合戦は、『懐かしの歌特集』のコーナーになり、他の入居者達が歌を口ずさむ中、阿部は相変わらず指を折って字数を数えている。

「ちよつ、中村さん！　ウズラの卵切れるよ！」

「……ウズラ？」

湯気の立つ鍋を開け、醤油を入れながら、中村は眉を寄せる。

「入れませんよ」

「え？」

「うちのは、入れないんです」

「雑煮なのに？」

中村は鍋の中の汁を椀にひとすくい取り、鈴木に差し出す。

「んむ……何これ、うまつ！？ 超うまつ、え、何、マジ？ うわわつ、え？ ちょ、ねえ、何これ？」

「雑煮は千差万別ですよ」

「これでウズラの卵さえ入ってたら！」

「分からん人だな」

「ういーっす。お、良い匂いだなあ」

玄関のドアが開き、晴れ着姿の松野千里が入って来る。

「あれ、リーダー？」

「リーダー！ ウズラの卵買って来て！ この旨い雑煮を完成させるためには、ウズラの卵がなければいけないんだよ」

「雑煮？」

松野は首をひねる。

「余り材料を色々融通しまして」

「そっか、ありがと。これで餅が禁止じゃなかったら、本当にお雑煮だったのね」

「へ？」

「食材で届いてるよ？」

松野は食材の箱を開ける。

「これ？」

無地の袋に入っていたのは、四角く白っぽい色で、細かな穴がびっしりと開いた――。

「高野……豆腐、だね」

「だああ！ 分かりました、入れます、高野豆腐もウズラの卵も入れりゃあ良いんでしようが！」

『生年を忘れて妻に笑われる』

「早まらないで、中村さん！ 阿部さんも認定調査を詠んでるし」

「それが今何になるんですか！」

テレビでは、小林幸子がチカチカと瞬いていた。

【パートB】

ジャンパー姿の阿部幸三は一つぶるつと震えてから、指を折って数える。

「夜風、いや、夜の風……」

「良い句が出来ましたか？」

妻の藤枝が尋ねる。

「ふむ」

曖昧に返事をして、幸三は歩く。

土の道は、本通りに繋がった。

街灯に照らされた歩道のない舗装道路を歩く二人を、丸みのある軽自動車
車が追い抜いて行く。

「車、か」

「良いですね」

「教師の稼ぎで買うには、まだ高い」

通行人が一人、また一人と増えていく。

明らかにそれと分かる人の流れが出来始めた頃、行く先に露店の光と、鳥居が見え始めた。

両側に露店が立ち並んだ参道は、二年参りの参拝客でごったがえしていた。

「……肩がぶつか……肩に……ごつんと……」

幸三と藤枝は、境内へ進むことも出来ず立ち往生していた。

「これだけ人がいると逆に暑いみたいですね」

「ん」

幸三はほんの少し背筋を伸ばして、露店を眺める。

「ラムネでも、飲むか？」

「すてきね」

二人は人を掻き分け、ラムネ売りの露店に辿り着く。

代金を受け取ったラムネ売りが水槽からラムネを一本引き上げ、栓を抜

き、幸三に手渡す。

幸三は溢れた泡で濡れた瓶を手でひと拭いして、藤枝に手渡す。

藤枝はラムネのビンに口を付け、一口飲む。

「うわ、冷たっ」

「そんなにか？」

幸三が受け取り、飲む。

「……む」

二人は一口づつ飲み続け、ようやく瓶を空にした。

「……熱いおでんでも、喰うか」

「大賛成——あら？」

瓶を持つ幸三の腕を、藤枝が見つめる。

同時に、あちこちから拍手や歓声が上がりはじめ。

「やれやれ、こんな所で新年を迎えるとは」

「良いじゃありませんか」

ゆつくりと人の流れが出来始める。

「四十二歳……厄年か」

「満で数えれば、まだ四十一ですよ」

「ん、そうなるのか？ ええと、生まれが大正七年だから……」

「え？ 八年でしよう？」

「それは数えだろう？」

「あはははっ、数えだろうが満だろうが、生まれた年は同じです」

おかしげに藤枝は笑う。

「あ……」

「自分の生まれた年を忘れたかと思いましたよ。ふふっ、うふふふっ」

「笑い過ぎだ」

「だって、うふふふっ、ふふふ、あはははっ！」

「行くぞ」

無然とした表情で、幸三は藤枝の手を掴むと、参道を進み始める。

「……あ」

「どうされました？」

「いや……何でもない」

苦笑いしながら、幸三は思いうかんだその句をもう一度繰り返した。

『生年を忘れて妻に笑われる』

いつの間には雲が切れ、空には星が瞬いていた。

13 「限界疾走！」

三郎

【パートA】

舗道の両脇に草原が広がる、片田舎の交差点。

俺は愛車に跨り、信号待ちをしていた。時刻は午後八時を回ったところ。

吐く息が白い。いつにもまして寒さが身に染みる夜だった。

幸い、道は空いていて他の車はいない。晴れ渡る夜空に、平均的な湿度。

寒いことを除けばベストコンディションと言ってよかった。

こんな日は、奴が現れるんじゃないか、と予感がした。

予感と言うより、統計的な推測だったかもしれない。

俺が呼ばれるときは、奴も呼ばれる。

案の定、聞き覚えのあるエンジン音が後方から近づいてきて、俺と並ぶ

ようにして停車した。

「よお、また会ったな。トミノだぜ」

そいつは至んだ笑みを浮かべながら、俺に声をかけた。

まだ若い男。バイクはボディ全体が鮮やかな赤で塗装されている。同じ色のジャンパーとヘルメットを装着したその姿は、夜闇の中でも存在感を放つ。いけ好かない、嫌でも目に焼きついてしまう真紅のライダーだった。

これで五度目だが、遭遇するたびにこいつは「トミノ」と名乗っている。

トミノ、トミノ。そこまで主張しなくても、もうお前の名前は覚えた。黙ってやがれ。

「あんたが信号で停まっててくれて助かったよ。おかげでまた勝負できる」

「勝負、か」

好戦的なトミノ。挑んでくるなら受けて立つまでだ。

この若造、態度がでかいだけあってなかなかの実力を有している。戦績は二勝二敗の五分。お互い、今回勝てば勝ち越しということになる。

「確認だけど、おっさん。サタケさんちの旦那に呼ばれてるんだろ？」

「そう言うトミノはサタケさんの奥さんだな」

「ビンゴ♪」

トミノは嬉しそうに言う。俺もトミノも同じ場所、サタケ邸を目指しているのだ。人家の少ない道だから、確かめるまでもなくお互いの依頼主は特定できる。念のための確認を終えて勝負は成立。細かいルールは、素人じゃないんだ、ちゃんとわきまえている。

「この地区のナンバーワンはあんたじゃない。この『紅の閃光』、トミノだ。それを今日、証明してやるよ」

「ナンバーワンを名乗った覚えはねえが、お前などに後れをとるのは俺の矜持に反する」

俺は敵意を隠すことなく、言い捨てた。

歩行者用の信号が点滅を始めた。間もなくスタート。ハンドルを握りなおす。

【パートB】

青信号と同時にアクセル！ スタートは互角だがマシンの性能の差か、加速はトミノの方が早い。迷わず制限速度までスピードを上げた。俺も最高速度に達して維持。わずかに先行され、視界の左端に目障りな赤い姿が入り込む。

誤解する向きも多いようだが、俺たちはスピード狂の走り屋じゃない。法的な制限速度を遵守した上で早さを競う。公道では速度ではなく、度胸とテクニクで攻めるのだ。

きつめの右カーブに差し掛かる。俺はイン側、トミノはアウト側。走行距離はイン側の方が短い、そのかわり対向車線に近い！ 折り悪くちょうど対向車線にヘッドライトの光。膨らんで曲がりたところだが、それではタイムロスになる。ここは恐怖心を克服しろ！ 速度を落とさずコーナーに突入し、通過！ 対向車に近すぎず遠すぎず、安全を確保しながら最短距離を駆け抜けた。

カーブを抜けて、並走。俺は序盤での遅れを完全に挽回した。「そうこなくつちな！」

走行中でも響くトミノの声。勝負を楽しんでやがるが、走りに緩みは見られない。こいつも俺と同じく、熱いものに乗せて走っているのだ。

ここから先は楽しむだけの余裕もなくなる。公道が終わり、サタケ氏の私有地に入った。アスファルトではなく凸凹の激しいダートコース。悪路だ。

「うおおおおお！」

並みのライダーが高速で突っ込めばハンドルを揺さぶられる。ここで勝負するには路面の凸凹を見極める観察眼と、暴れるハンドルを御する膂力！ そして速度の限界に挑む気持ちの強さ！ 私有地になって速度制限がなくなった今、俺もトミノも一歩も引かずに加速。必死の制御。絶え間なく衝撃にさらされ、強く握る手に振動が伝わる。

ハンドルが大きくぶれたのは、俺ではなくトミノ。路面を見誤ったか、大声で悪態をつきながら減速。俺はその隙に大差をつけた。

勝った！

勝利は確定。俺はトミノに勝ち越した。

ゴールのサタケ邸は目前。もはや逆転の余地はないが、ぎりぎりまでスピードは落とさない。トミノに勝つだけで満足してはダメだ。俺はコンマ一秒でも早くサタケ氏にこれを届ける。それがこの世界で生きる男の矜持！

後輪を滑らせながら、家の扉のそばで横向きに停車。

呼び鈴を鳴らして俺は叫ぶ。

「ラーメン三郎、お待たせしやしたっ！」

少しでも熱いうちに召し上がっていただきたい。味でも早さでも、トミノピザなどに負けるわけにはいかないのだよ。

14 「ぬる☆はち〜Null(endless)8〜」

西尾青菜

【パートA】

D4 この物語は萬歳高校1年F組の日常を淡々と描いたものです。過度な期待はせずにご覧ください。

D5 みっちゃん、誰に向かって喋ってるの？

- 1 2 3 4 5 6 7 8
- A 女野茶寝空女男
B 師女欠男女男男女
C 教男女男男男女男
D 卓女女女女寝男男
E 男女男男男女
F 女女飲女空颯霊
- A2 あくあ。休み初日の朝イチから夏期講習スタートとか夏休み全然意味ねーし。
- A3 俺も夏休み無いようなもんよ？ 地区大会で負けても秋季大会の練習がびっちりだもん。
- A2 ああ、野球部かあ。うちの学校の野球部って、強いのか？
- A3 ちよ、おまつ、うちは三軍まであるし！ 毎回ベスト4まで行くし！
- B2 で、ベスト4ってのはどれくらい偉いわけ？ 賞金出るクラス？
- A3 出ねえけど…。
- B4 出るんじゃないの？ 甲子園とか優勝すると。
- A3 出ねえだろう。
- C1 でっ、でも部費はいっぱい出るじゃないか！ うちの演劇部なんか16万ポッキリなのに！ 野球部なんて120万円ももらって！
- A3 そらー、三軍まであるからな。コーチも雇わなきゃいけないし。
- B2 つか120万も出んの？ すごくてね？
- A3 だからうちは部員が60人いんの！ ひとり20,000！
- C1 勝った！ 演劇部は7人だから1人20,000えーん！
- A2 うわー、真鶴ウザッ！
- B6 おまえ、夏どうすんの？
- C6 夏…コミケぐらいじゃね？
- B6 ああ、行くんだ。
- C6 っていうか合同本が落ちそう。
- C7 ホン、つと間に合わせてよね？ 根府川くん？
- C6 ……すみません。
- F7 じゃ、明後日6時半に品川駅の5番線ホームに集合ね！ 遅れたらお昼ごはん全員分、おごりにするわよ！
- B1 ほら鴨宮、席に戻れ。では諸君。夏休みだからって好き放題やればいいというものではないぞ。ちゃんと9月1日には40人全員が元気に顔を揃えるのが君たち生徒諸君の勤めだ。
- D2 先生、それマジ笑えないんだけど。
- B1 あ、それはそういうことじゃなくてだな、湯河原だって手術が成功すれば、新学期には間に合うそうさ。まあ、おまえらも暇があったらお見舞いに行つてあげてくれ。きつと喜ぶと思うんだ。
- D7 お見舞い…見せもの。病人は見せものか？
- D8 見に行けつたつて湯河原となんか喋ったことねえしなあ。
- D6 ムニヤ、お、お母さん？
- D5 みつちゃんww、茅ヶ崎が「お母さん」って！
- D4 お前か！ お前が茅ヶ崎のおむつを替えたのか！
- B1 まあとにかくだ！ 高校時代の長い休みなんかさうあるわけじゃない！ 存分に楽しむように！ 以上！ 委員長号令！
- C7 起立！ 礼！

【パートB】

■ 1 2 3 4 5 6 7 8

- A 女野茶寝男女金
- B 代男花男女男男女
- C 教男女罪男男女男
- D 頭女紫み女寝空空
- E 男女男男男女
- F 霊女姦男男女孕

B1 えー、夏休み明け早速ですが、一部報道にもあるとおり、早川先生は中国旅行中に行方不明になりました。現在捜索中ですが、代理として
担任業務はこの小田原が、担当の古典については西湘貨物先生が担当
されます。

C3 (そんな苗字の日本人がいて、たまるか！)

E2 うわ、美代ちゃん黒っ！

D4 夏の間日サロでバイトしてたからー。なんか使い放題で調子に乗って
焼いてたんだよねー。

E2 それに：美弥っちも：むらさきっ！ 超紫！

D3 ギョケゴケキョロケー、ピオリー。

D2 なんか美弥っち身長伸びたよね。美代ちゃん黒板見えなくなっけ？

D4 うーんー、別に問題ない。昔からそんなに黒板見てないし。

C3 (いいなー夏デビュ。戸塚さんとかなんか肌がエロいもんなー)

D3 キュルルル、ケケケケ(パクパク！パクパク！)

B1 戸塚さん！ 学校で触手は禁止よ！

A4 びえつきしっ！

B8 前から思ってたんだけどさあ。

A7 何？

B8 あれ、加藤茶じゃね？

A7 あ、やっぱり？ ありえなくね？ ちゃべえよ……

B8 ちゃべえwwwカトちゃんだけにwww！

C7 嘩んただけwwwうるせえwww

D5 ちよつと、みっちゃんみっちゃん。

D4 何だ愚民。

D5 愚民じゃねえよ！ あんた何嘘ついてんのよ！

D4 なに嘘ついてるって：嘘だが。

D5 そうじゃないでしょ！ あんたが黒いのはマグロ漁船なんじゃないの？

D4 あれも嘘。

D5 嘘って：あんた一昨日マグロ引きずってうちに来たやんけ！

D4 し・

D4 こ・

D4 み☆

D5 …。

E1 誰だよ：教卓の上にマグロの頭置いたの……

C1 違うわ！

D1 甘いぞ！ よく見ろ！

C5 げえっ！ よくみたら2マス分のでかくなつた教頭！

C1 ふははは、まぐろの頭とフュージョンして二倍になつたのだ！

D1 マグロは160km/hで海を泳ぐのだ！ だから強い！

C3 (あーあ、要らない豆知識だ)

D3 ブルーア！ キンシャ——！

E2 あっ！ 美弥つちが巨大教頭と戦おうとしている！

B1 やめなさい戸塚さん！ 強酸は禁止よ！

A8 パンニハムハサムダ！ ヨウチョンギレルハサミダ！

C8 あそこの太つたオヤジが戸塚を操っていたんだな！

A8 ハハそれは違うぞ品川くん！実は私が(ベリベリベリ)

F5 ああっ！ 金ナントカだと思つたらあれこそ本当の戸塚さんだわ！

D6 むにやむにやもう食べられません。

F7 気持ち悪い……。

15 「橋の上」

【パートA】

子どもの頃は、この橋が嫌いだった。

バブルン

何か悪いことをすると、必ず父が私を肩に担ぎ上げて「川に捨てに行く」と言つてこの橋に向かうからだつた。

川は激んでいて、どぶ臭くて、子どもながらにこんな川に落とされたら、ひどいことになると思つていた。

親は厳しく、いつも私をぎりぎりまで追いつめて反省させる。肩に担がれた私は、手足をばたつかせて、鼻水が止まらなくなるほど、むせび泣きながら、「もうしません、もうしません」と大声で謝るのだ。そんな記憶が、この橋の上に戻るとよみがえってくる。

こうあらねばならぬという強い思いのある両親に育てられた反動で、私は自分にも他人にも甘い人間になっていた。橋の上から夕方の景色を見ると少し切ない気持ちになつて、いろいろな思いを巡らせてしまう。橋の下を見ると、大きな黒い鯉が柳の影を切り裂くように泳ぎ、水面がゆれ動いている。今現在、なんとなく親に不満があつて生活して来たとしても、これまでの人生、親の敷いたレールからはみ出さずに生活してきたといえるだろうし、これからもたぶんそうなるであろうと思われた。

ある時、祖父が亡くなつたのを機会に祖母の家に身を寄せることになった。両親から祖母が寂しいだろうから一緒に暮らしてくれないかと言われて始めた生活であつたが、すごく気持ちがあつた。もう就職していた私の身の回りの世話を祖母はすべて引き受けてくれて、私にとっては大変心地よい思い切り甘えた生活が始まつた。

【パートB】

祖母は気持ちが悪くて、お茶目だ。

私がシェイプアップのために音楽をかけて体を動かすと一緒にやってみるし、エアロビクスのような激しい動きにもついていこうとする。朝食はいつもデザートのお菓物を用意してくれていたし、仕事の愚痴も聞いたり、私の気持ちに寄り添って一緒に怒ってくれたりもした。そんな生活だったから、自分の家に居る時に感じた息苦しさをまったく感じなかった。結構自由な時間もあり、例えば、祖母はいつも夜十時には寝てしまうから、いくらだつて友達に長電話ができたし、文句も言われなかった。

友達……

友達はいたけれど、非常識な時間までだらだらと長電話出来る友達はいなかった。つきあっている彼はいたが、仕事で忙しく、生活も気持ちもすれ違っていた。ぼっかりあいた時間を持て余し、携帯電話をみつめるが、こんな時にメールをしても返ってきた試しがない。そんな彼に電話をしても鬱陶しがられるのが落ちだった。

いつしか私は祖母の目を盗み、家を抜け出しては、夜遊びに更けるようになっていった。橋をわたった少し先に繁華街があり、橋を抜ける時は、解放感と冒険心に満ち溢れていた。私は若かったし、初めて会う人にも愛嬌良くするからちやほやされて少し調子に乗っていたと思う。まったく私は歯止めが効かなくなる性質だったようだ。朝はなかなか目覚められなくなり、朝ごはんも抜いて出勤するようになってしまった。

ある朝、そんな私に祖母がぶつぶつ言ってきた。「まったく、おまえはよた

かだよ、よたか。夜中に家を抜け出して……」いつもより強い調子だったから気になったが、出勤時刻だったから走って家を出てしまった。よたかってなんだっけ？おばあちゃんに聞くわけにもいかず、国語辞典を引いてみて血の気が退いた。『夜鷹…江戸時代、夜間、町に出て客をとる下等売春婦』とあったからだ。

橋の欄干にもたれかかり、自分のことを考えていた。川は真つ暗だ。夜鷹かあ、そう言われたのは結構痛かった。確かに人の気を持たせるようなことを言ったり、思わせぶりなことをして楽しんでいた自分がいた。自分の姿も映らない橋の下を見つめ、暗闇に吸い込まれそうになって考えた。

23歳にもなつて……

この橋の上でもうしませんもうしませんと泣き叫んだ自分を思い出し、親に言われたからやらないという訳ではないんだ。心配してくれる人を悲しませるようなことをすることはよそう。そう橋の上で決心した。

16 「エニグマ変奏曲」

渡り廊下走り隊

【パートA】

「佐藤さんってまじよってるよね？」

ふと、顔を上げると。得意げに笑うクラスメートの篠森さん。自慢のウエーブのかかった髪を撫でながら。私を見下ろす。

魔女みたくすましてるって事かな？

「いや……そうでもないかも」

私は当たり障りのない返事をして笑顔を返した。

常にクラスのリーダー格として、君臨する篠森さんの会話は流行り言葉を使っていて。私には理解不能。でもわからないと、ハブられる可能性がある。適当に合わせて後から意味を調べると言うのが私のやり方。

小学生の会話と言えど、迂闊な発言一つで平坦な小学校ライフが地獄と化す事を私は知っている。だから私は地雷を踏まぬ様。篠森さんとあまり話さないし。話しても笑顔を崩さず、フィーリングだけ合わせるようにしてきた。

篠森さんは機嫌よく。馴染みのグループに戻って行く。

「まじよってる？」

私は新たな暗号に頭を悩ませながら、それを悟られないように。手元の小説に目を落とした。静かに篠森さんと愉快的仲間達の会話に、猫の様に耳を立てる。

会話の節々に『佐藤さん』とか『意外』とか聞こえる。私の鼓動はバク

バクと音を立て。続けて愉快的仲間達が『信じらんない』と呼応する。

まさかの地雷！？なに？”まじよってる”って！心臓は爆発寸前。まるで私は地雷原に放り出された猫兵士みたい。地雷の位置を知るまで、ホフクのまま一歩も動けない。ピンと耳がトガリ、髭の端まで緊張感に包まれている。そこはもはやキルゾーン。前進も後退もまかりならない。

『にやんだ？地雷どこ？メーデーメーデー！応答願います！』

机の上の砂漠で、武器の無い猫兵士が背負いこんだ無線機に押し潰されそうになっている。このままでは孤立し、砂嵐で埋もれてしまうかもしれない。戦争だ。これは戦争なのだ。

過去も現在も戦争の要は”情報”。情報を征する者が勝つのである。それは私とて同じ事。戦況は奇襲を受け、先手を取られた形。何せ相手は巨大な帝国を築き。暗号機エニグマを要する難敵だ。私には仲間すらいらない。絶対絶命のピンチっ！まず、そう解読っ！

私は急いで図書室へと向かう。教室にもパソコンはあるが、そこで調べれば履歴で足が付くばかりか。その場で発覚する恐れがあるからだ。目指すは図書室のフリーのパソコン！

【パートB】

図書室の扉を開けると。パソコンは全て埋まっていた。口から魂が抜け出しそう。

「どしたん？チヒロ？」

と、パソコンの影から顔を出す女子。それは私の親友、辻本美咲であった。

「つつちー！」

「おーよしよし。お姉さんに話してごらん」

「まじよってるってどう言う意味？」

「まじよるう？」

「篠森さんが言ってたんだけど。適当に返事しちゃって！」

「なんで直接聞かないのさ？」

それが出来たら苦労はしない。つつちーは他人の目を気にもせず。ズバズバ言い切る羨ましい性格の持ち主だが。ときに無神経なのが玉に傷。

それから『まじよってる』で検索をかけたが。一向に篠森さんの“まじよってる”に行き着かない。どれもこれも合ってる様な気さえしてきた。

私は流行り言葉を知らない悲劇を知っている。あれは昔、父が風呂上がりに「ああーキモかった。超キモい。チヒロも早く入れよ」と恍惚な笑みを浮かべて言った事件。私は絶対あんな自爆テロを引き起こしたくないのだ！

私は目を皿の様にして画面を見つめながら、マウスをドラッグする。

「チヒロ！ほら。篠森の彼氏いんじゃない！」

と、つつちーが急に廊下を指さした。

そこにはイケメンの細川君が歩いていて。つつちーが「聞いてこーい！」と、私の背中を蹴飛ばす。

廊下にはじき出された私は、不自然な様子で細川君の前に立ち塞がった。

「佐藤さん？」

「ああ、あの。篠森さんが言ってたんだけど。まじよってるってどう言う意味か知ってる？」

細川君はメガネを軽く中指で上げ。少し思い出すように左上を見上げた。「ああ。それはマジョリテイの略で。成績が半分より上かどうかって事だ

と思うよ」

「本当に？」

「篠森がそう言ってたよ。使い方があってるかどうかは知らないけどね」

キンコンカンコン

昼休みの終わりを告げる鐘。私はその祝福の鐘を背に、教室へ凱旋した。もはや何も持たぬ猫兵士では無い。地雷原を平気で飛び越える翼を得たに等しい。もう何も心配いらぬ――。

――下校時間。私は教科書をまとめていると。篠森さんが憤怒の表情で、私の机の前に立ちはだかった。

それはまるで、遥か上空を飛ぶ大型爆撃機の様。影った地雷原で、空を見上げる猫兵士。

「佐藤さんっ！どうゆうーこと？アンタが細川君と仲良く話してたって聞いたんだけど！」

『ドオオオッ！！』

落とされたのは、核爆弾だった。私の視界は消し飛び、真っ黒な闇にのまれた……。

『メーデーメーデー！応答願います！メーデー！！！！！！』

17 「メールが届きました。」

Mr.ドリト・スミス

【パートA】

知らないメールアドレスから一通のメールが届いた。

思いやりの国をつくりませんか。

私は思わず吹き出してしまった。

変なメール。

オッケー

私は面白半分で返信を試みた。携帯電話はそれっきり何も反応しなかった。

だから次の朝、テレビのニュースで大騒ぎになっていた時は本当に驚いた。

『思いやりの国をつくりませんか。謎のメール全国一斉送信！』

テレビに釘付けになってしまった私に、お母さんがやくねくと手首を曲げる。

「私にも来たわあ。お父さんなんて携帯二つ持ってるでしょ。二つの携帯が同時に鳴ったからビックリしたって。やくね〜早く〜飯食べなさい」
一部無線通信サービスでは、気象庁が配信する緊急地震速報や地方公共

団体が発信する災害や避難情報などを、携帯電話に送信するサービスがありますが。今回のメールはそれらとは異なり、個人情報流出の可能性も考えられ、無線通信サービス各社は今後の対策を……とアナウンサーが早口に言った。

学校へ行くとやっぱり昨日のメールで大騒ぎになっていた。

「見て！ ツイッターも掲示板も例のメールですごい騒ぎだよ！」

「本当だ」

政府の暇つぶし、テロリスト参上、重い槍の国、どれだけ画面をスクロールしても話題は例のメールについてだ。

「すごいね」

私は呟いた。

でも本当にすごいのはここからだった。

冷やかしたり、ふざけたり、犯人探しばかりで溢れていた掲示板は減っていた。

次第にその日した良いことを自己申告で書き込んでいく掲示板や、その日してもらった親切を報告する掲示板が増え始めた。もちろん、そこに馬鹿らしい、踊らされてる、自己満足、なんていう批判コメントも多く寄せられたけれど。

ひとつ盛り上がれば、競争するかのようになると新しい掲示板やサイトが作成され、オフ会を開いてボランティア活動をしようと呼びかけや、その活動報告なども寄せられた。さらには募金で集まられたお金で心臓の手術に成功した少女なども現われ……。

最初はみんな、面白半分、遊び半分、ネタ欲しさ、反応欲しさだったかもしれないけれど、良いことをした達成感と充実感が活動の広がりや継続理由となっていて、いつの間にか思いやりの国をつくる様々な活動が広まっていき、日本はほんの少しだけ優しい国になった。

思いやりの国をつくりませんか。

メール発信者の思惑通りの結果になっているかどうか。それは他の謎と共に、謎のままである。

【パートB】

知らないメールアドレスから幾千通のメールが届いた。

お前はだれだ。キモイ。死ネ。ワロス。意味不。

浴びせられる罵倒と非難に心を碎かれそうになった時、俺の目に一通のメールが飛び込んだ。

オツケー

たったそれだけのことだった。俺は涙で画面が見えなくなり、大声をあげて泣いた。

何をやってもダメな俺、引きこもりの俺、生きる意味が見えない俺、ただ消費するのみの俺。

ああ、そうか、俺はただ、認めてもらいたかっただけだ。

さて、そんな引きこもりの経歴を持つ俺ですが、そんな人間が人にものを教える職業に就くとは驚け轟けである。俺は今、不登校の生徒の家へ遊びに来ていた。

「負けたー！ なんだそのコンボは！」

「昨日発見した組み合わせっす」

はじめは無言で対戦していた生徒も言葉を交わしてくれるようになった。「若い時だったらもう、ボッコボコにしてやれんだけどなあ。ゲームも新しくなると訓練が必要だな」

キャラクター選択画面でキャラを吟味していた俺に、生徒はボソツと言った。

「若い時って、もつと強かったんっすか？」

「まあ、俺も引きこもりだったし」

キャラクター同士が向かい合い、攻防を繰り返す。ガードの固い生徒の操作に、俺は下段を繰り返してみるが、難なく読まれ、カウンター。浮かび上がったキャラクターがきやあきやあ色っぽい声を出しながらコンボを打たれる。顔を歪める俺に、生徒はボソツと聞いた。

「なんでやめたんすか？」

二百三十三日目にしてようやくの好機。

「信じられない話かもしれないが、俺は国をつくったことがある。それも引きこもってた時にだ」

「信じられねーっす」

「だろうな。俺のしたことは犯罪に近かった。いい風に乗ったから詮索されずに済んだもの。下手すりゃ刑務所行きだったかもしれん。が、一生

懸命取り組めばもつと色々なことができると思つた。だから外に出た！」

「なんだ、説教っすか」

「悪い。職業病だ」

ふーんと退屈そうな相づちを打たれてしまったので、今日はこの辺でやめておくとしよう。

「さーで、可愛い嫁が待つてるから俺は帰るぞ」

ゲームも一生懸命取り組めば、有名プレイヤーとして雑誌に取り上げられるかもしれない。ゲームをつくることに興味がわけば、もしかしたら商品化できるかもしれない。そんな話しができる日は近いはずだ。

そして一生懸命取り組んだ時、誰かがオッケーと言ってくれればいい。

俺の嫁がそうしてくれたように。

18 「無冠の剣」

空腹の亡霊

【パートA】

鱗が覆う漆黒の巨体を陽光が煌かせている。

鉦山を襲った化け物は、その山頂に居を構えようとしていたらしい。

細長い顔の頭頂部には2本の角が突き出、深く裂けた口からは切っ先の

ような牙が覗いている。また、四肢の太さは大木のようにあり、そこから伸びる分厚く鋭利な爪が、力強く地表に突き立てられていた。

だが、最も脅威を覚えるとすれば、こちらを注視する真っ赤な両眼であろう。

正体は黒いドラゴンであった。

しかしその存在は架空の類とされてきた。

大陸の長い歴史の中には目撃談もあるが、それらの多くは深夜に廊下を漂うゴーストを見るのと同等の扱われ方であり、時にそれに劣ることすらあった。

ならば翼の在る巨大なトカゲとでも言うのか。

卿は自らを嘲笑い、背後を一瞥した。

大小の岩石が支配する大地に、黒い煙と火の溜りが見える。それは20名もの従士が一同に燻っている様であった。

戦乱が終わり、大陸に泰平の世が訪れた。そうして時代の流れに身を委ね、感を腐らせた精鋭達の成れの果てだ。

もはや武名とは無縁の時代となつてしまった。しかし、ドラゴンよ、書物と虚言の中でのみ生き永らえてきた者よ。貴様が何故に姿を現したのか、その答えを私は知っている。大陸広し、だが貴様は我が前にこそ現れた。それは即ち――。

腰の剣へ手を伸ばす。指先に鋼の冷たさを感じた。

飾り気のない無骨な柄を握り締めると、ラックハーバー卿は長剣を静かに引き抜いた。

鈍い鉄色の煌きの中に、卿の顔が霧のように映っている。外側へ反つた三日月形の分厚い鏢があるが、刀身の方は只管に頑強さと斬れ味のみを押し出したような、色の無い形をしていた。

洗練された刃の向こうにドラゴンを見詰める。

卿の腕力をして、この剣は多種多様の鎧を貫いてみせた。しかし、この剣が生を授かったのは、泰平の時代も間も無い頃であった。

鉄騎兵どもを突き殺し、血肉の中を掻い潜り、新たな鋼鉄を貫き進む。そのような機会は永久に失われてしまった。

「まやかしの様な貴様は、この剣に斬られるか否かがために、我が前に現れたに相違ない」

興奮が全身を駆け巡る。己の中で懐かしい戦友に出会ったような気分だ。その血潮に促されるように、卿は大音声で叫びを上げた。

「我が誇りと名誉の集大成！ その括りに相応しき名を此処で頂戴せん！」

剣を下段に構え、ラックハーバー卿は強襲に踏み出した。

【パートB】

巨大な背にある両翼が羽ばたきを始めた。

皮膚のような翼は、空気を孕み、唸るような音を発する。刹那、無数の小石が礫として襲い掛かってきた。

手で顔を庇いつつ、ラックハーバー卿は駆け続ける。石の嵐は革鎧の上からでも強烈な痛みを走らせた。

ドラゴンは翼を止めた。そして長い首で卿を追い、大きく口を開いた。吹き出る冷や汗と共に、卿は咄嗟に迂回する。その脇を火矢よりも早い炎の塊が通り過ぎた。かつての精鋭達を一瞬にして炭に変えた炎である。

ドラゴンは卿の動きに合わせて、次々と炎を吐き飛ばしてきた。それらは

卿に追い縋り、時には進路を阻んで舞い散った。

行く手に砂煙が上がった。相手の脚程もある尾先が目前に迫っている。卿はほぞを固めた。そのまま敵の脇腹を衝くべく一直線に疾走し、津波の如く押し寄せる砂塵の中へと飛び込んだ。

空を打つような低い音と、強い風が靴底を過ぎていった。

地に足を着くが、隼の如くドラゴンの前足が現れ、卿を打ちのめした。度肝を抜く間さえ無かった。脳が揺らぎ、上下の顎がぶつかる。視界は

暗転を繰り返した。

上半身に激痛を感じた。見れば、鎧と服は引き裂かれ、胸の肉は広く抉り取られていた。血が腹の上へと流れ、裂けた衣服を濡らし始めるのを感じた。傷口は烈火に晒されたかのようなのである。

目を開け！ 彼奴を見よ！

執念、或いは憎悪が叫ぶ。横合いから再び前足が飛んできた。亜獣が！

憤怒し、剣を薙いだ。切っ先の向こうに血が飛散する。頑強な爪と、太い指とが宙へ散らばっていった。

ドラゴンが咆哮を上げた。憎しみに燃える赤い目がこちらを見下ろす。氷柱のような牙が、一気に食らい付いてきた。

転がるように卿は避ける。そしてすぐさま片膝の体勢になるや、相手の喉目掛けて、有らん限りの力で剣を繰り出した。

切っ先は鱗に衝突し、すぐに滑る様に突き進んでいった。

ドラゴンは天を仰いだ。その口から濁りのある音が途切れながら聴こえ、やがて大きな頭は無造作に地へ落ちた。

もはや動く気配は無い。

卿はしばらく佇んでいたが、己のか細い呼吸を耳にし、程なくして我に返った。

ドラゴンの亡骸は今もそこにある。

姿勢を正し、剣を掲げた。

この戦いを我と我が剣に奉げる。

亡骸を後にし、卿はゆつくりと歩み始めた。

岩の大地の果て、青空と穏やかな陽光の下にある岸壁へと……。

19 「ザ・ドッグファイト —史上最近—」

紅の鬼姫

【パートA】

外は騒がしい。ドロップは思った。

I 県Y町、ファミレスに学生の一人がいた。その中の一人、雫孝明は誰とも話す事なくガラスに額を付けて外を見ている。

愛称はドロップ。

彼が誰とも話さずボーっとしている事に周りの者は誰も咎めない。それもそのはず、彼が一団の頭だからだ。

「おい、ドロップ起きてるか？」

一団の外側から話しかける者がいた。ドロップはガラスから頭を離さず、振り返る。

「なんだ、ゴキか」

他校の制服を着た少年におもしろくなきそうに呟く。

ゴキと呼ばれた少年は、その反応に思わずしかめっ面になった。

「相変わらずだなお前。まあいい、用件だけ伝える。馬が群をなして攻めてきたぞ」

ゴキの放った一言に一団の少年達がざわつき始め、ようやくガラスからドロップの頭が離れる。

「……マジか。最近、大人しくしてたじゃねーか」

「マロニエがつかかった」

それで、ドロップは全て理解した。

「ハア、めんどくせー事しやがって。馬共にきっかけ与えちまった訳だ」

「そうだ」

「チツ、なにやってんだマロニエの奴らは。で、こっちは今どうなってるだ？」

「既に、最西端はやられた。恐らく次はお前の所に来るぞ」

「くそっ」

ゴキの持つて来た案件、実際の所関わり合いになりたくないのがドロップの本音だ。しかし、この地区で一番を張っている以上は逃げるのは難しい。現に、「難攻不落、イバラの城の力を見せてやりましょうよ！」といった声があちらこちらから聞こえる。

「別に、お前がよければ無視したっていいんだ」

それにゴキはこう言っているが、中央の猛者や平和ボケした海側の連中は許さないだろう。特に後者はネチネチとした嫌がらせをしてくるに違い

ない。

「仕方ねえ……、ぶつ殺す」

ドロップの一言に、その場で歓声上がる。その声にドロップの中で、何かがふつふつと湧き上がっていくのを感じた。一旦、腹をくくれば後は前進あるのみ。

普段は微塵も出さず抑えられている闘気が、ドロップの体を駆け巡る。

「行くぞお前ら、馬狩りだっ！」

席から通路へひとつ飛びで到達し、床を踏み砕く様な迫力で進んでいく。その後ろを、一団が付いていく様子は様になっていた。

一人残されたゴキは、その頼りがいのある後ろ姿が見えなくなるまでその場を動かなかった。

そして一言。

「ここの代金は俺持ちかよ……」

To Be Continued……

【パートB】

夜、街灯に照らされた駐車場。車一台ないそこに二つの軍勢。一方は様々な制服に身を包み、一方も制服を着ているが種類は同じ。二つは向かい合っている。その中央にドロップはいた。

眼前に、手を押さえ涙を流した少年が倒れている。

「馬の実力はこんなもんか？」

雫孝明。愛称・ドロップ。由来は「必ず相手に涙を落させる」に起因す

る。

「そいつは小手調べよ」

敵の軍勢、群れた馬から澄んだ声が上がった。少年達が道を開ければ、髪を腰まで伸ばした可憐な少女が仁王立ちしている。

「お前が頭か？」

「そうよ。あんたい腕ね。最西端は、そいつ一人にやられたわよ」

「あいつらは砦の外の雑兵。イバラの城の砦ではここからだぜ？」

「言うじゃない。こつちも赤い城を背負う身、尊敬するわ」

少女は笑みを浮かべながら前に出て、ドロップと対峙する。

「クロスアームデスマッチを希望するわ」

「ああ」

二人は両腕を伸ばし、互いの指を握りこむ。そして、親指を天高く突き上げた。

『勝負！』

声が重なり、親指が動き出す。相手の指を下すために。

ドロップは相手を誘い、少女は刺す動きで早々に仕留めにかかる。

鋭い攻撃にドロップは右腕を引き、バランスを崩そうとするが少女は力に逆らう事なく受け流し、左腕の注意も怠らない。そのまま右手を下げ転倒を狙うも少女が地面を蹴り、一回転した事で回避される。

回転した隙に左親指を押さえるが、回転しながら右親指を押さえ込まれた。

テンカウント。勝負は仕切り直し。

クロスアームデスマッチは両方の指を下さない限り終わらない。

下し下されの長期戦に発展し、普通に考えれば男のドロップが優勢と思われるが、それは違った。

ドロップの腕に血が伝う。

(こいつ、爪を研いでやがるッ！)

少女の爪が四指の皮膚を切り破っていた。それにより集中力が散漫になり、疲弊していた。痛みにドロップが顔を歪めた瞬間、少女の口角が釣りあがる。

ベリッ、左親指の爪を爪の間に突き刺し引っぺがす。

宙を舞う爪を見て勝利を確信する少女は、次の瞬間、枯れ木の折れる様な音と共に激痛に襲われた。甲高い悲鳴上げ、少女の頬に涙が流れる。

「女に使うつもりはなかったけどな」

見れば、意識から外していた四指を握り折られていた。ドロップは痛みによって動けずにいる少女の両親指を押さえ、下す。

「悪いが、お前らの遠征もここまでだ」

THE END

20 「取引と由来」

ムッソリーニ下等

【パートA】

ムッソリーニ下等はがやがや騒がしい中を掃除して居た。

近くでは女子剣道部と男子剣道部が合同で面打ちの練習をして居る様だ。

まあ聞き様によってはきびきびとして居て気持ちいい感じとも言えなくは無いが。

ダーズリン紅茶を飲みながらの優雅な掃除の仕方ではあったが、ムッソリーニ下等は気が急いで仕方が無かった。

ホウキとゴミ入れとモップを持って両手とも塞がって居た。

時間制限が有り、30分から1時間内にやらなくてはならない。

こんな所でヤクの取引が行われるのだろうか。彼には信じられなかった。

彼はヤク取引の探査も厳命されて居た。

ほとんど田圃の田中の未舗装の道がほとんどの中で唯一と言ってもいいアスファルトで舗装された駐車場であった。結構広い。今日は中学生の剣道部も練習に来て居る様だ。

彼はヤク取引の現場を見つけても逮捕は許可されて居なかった。飽く迄現場の撮影のみOKと言うのがゆい任務であった。

わくわくするだろう、だが時給は恐ろしく低いぞ。そのため現地の掃除もやって置く事を厳命する。と言った辞令を下等は受け取った。

わくわくはするが考えようによっては退屈な任務と言えない事は無い。

と言うのはヤクの取引は必ず行われるとは限らず、見渡す限り田圃の中の唯一アスファルト舗装された駐車場で何時行われるとも知れないヤク取引を待つて居なくてはならないからだ。

ゴミ回収車が30分から1時間である予定なのでそれまでに掃除を高速で終えておかなければ契約違反で委託料を受け取れなくなつて仕舞う。

下等は掃除が終わったあとは恐ろしく退屈するだろうと言う予感に苛まれ憂鬱な気分になった。

「ムッソリーニ下等さん、少し予定を変更します。最寄りの○○スーパーにてコードネーム「グッチータニエン」ミットトヨトヨトウシニイナレ

「イマモンタガヤシ」と言う名のヤク取引が行われるから掃除はもういいから至急現場へ急行されたし」

と、下等の小型無線に急電が入った。

上司の瀬田耕練さんからだ。

「コウレンさん何かやたら長つたらしいコードネームですね」

「どうもヤクの成分をもれなく暗号にして反映させた結果この様なコードネームとなったそうさ」

「そうですか」

「それはそうと、お前が今居る所で剣道やって居る連中な実は特殊部隊なんだ。使ってやってくれ」

そうだったのか、確かに防具で隠れて居るし中学生にしては発育がいいとは思って居たが。

【パートB】

ムツソリーニ下等は名前からも分かる通り、母親は「下等」姓の日本人だが父親は「ムツソリーニ」姓のイタリア人だった。

偶然の一致でイタリアファシスト党党首のムツソリーニとは血縁関係は無かったが彼の父はその事を大変誇りに思い、息子のファーストネームを「ムツソリーニ」にして仕舞った。

「ムツソリーニさん、ムツソリーニと言うのは通常名字であって、名前と言うかファーストネームとしてはおかしくありませんか」

「細かい事は気にするな。日本だってマキ容子と田中真紀子見たいにどっちが名前でどっちが苗字か分からん例はいくらでもある」

「しかしそれは慣例で元々そうなのであって、自分の思い付きで勝手に付けていいと言う訳では無いですよ」

「馬鹿もんが、元をたどれば必ず誰かの思い付きが通つとるんだわい」と言う具合で強引に押しこんで仕舞った。

父は母の家に養子に入つて居たので、「下等」姓だが、父のくだんの画策によって結果的には父の姓も母の姓も引き継いだフルネームとなっていた。父は元々イタリアのマフィア「セッターがやがや」のボスの息子で名前が少しふけて居るが、中身さえしつかりして居れば組織と言うのは発展して行く物だと言うのがボスの自論で、その上日本語も堪能だった、ムツソリーニ下等の父方の祖父は軍隊で特殊部隊の訓練を受けて実戦でも大いに活躍したごうのものだった。

そのマフィアのボスの息子がどうして日本人の下等さんと結婚したかと言うと、丁度そのころ「セッターがやがや」の資金繰りが困難な時期にあり、下等さんが金持だったので、渡りに船で都合が良かったのだ。ついでに下等家でも国際的なビジネス活動を通じて「セッターがやがや」に対して借金があり、都合が良かった。

その様な来歴を背負つて居るためムツソリーニ下等には仕事と言えば密命を帯びた特殊任務ばかりが下されるのだった。

「コウレンさんどうしました」

上司の瀬田耕練は急電を傍受して怪訝そうな顔をした。

「今スーパースーパーが爆破されたそうさ」

「スーパースーパーは今改装中で誰も居ないのでは」

「客は居ないかも知れないが工務員や従業員が居るかも」
ムツソリーニ下等の顔色が変わった。

「そして、実はセキュリティの為其処にはボーナスもおかれて居たとか」

コウレンさんの顔色がもつと変わった。

21 「鬼門の守護者」

【パートA】

黄金蝙蝠

「電車とホームの間は広く開いている所がありますので、ご注意ください」
車掌の声がした。真っ暗だ。頭が重かった。周りに人の気配はあるが、何も見えない。何も見えないが、何かに酷く顔をぶつけたような事だけは覚えていた。

「次は、秋葉原、秋葉原」

そんな駅名はあったろうか。扉が開き、人の出入りする気配がした。足を投げ出すような雑なやり方で、隣に子供が座ったらしかった。今日は半ドンドだったろうか。

「あなた、つかれているよ」

扉の閉まる気配に続いて、少年の声がした。

「こっちの世界に迷い込んでしまったらしいぜ」

更に少年の声がした。少し考えて、答えた。

「何かおかしいというのわかります」

時折、幾人かの人の気配とは全く別に、虚（うつ）ろでなまめかしい二つの瞳に見られているような感覚に襲われた。目を凝らすと、肉に埋もれかけの卵の殻のようなそれらはしかし、そこには全く存在していなかった。

「気が変になってしまったようです。」

何も見えないのに、恐ろしいものが見える気がしている」

黒電話のような鈍い暗闇が恐くなり、私は少年に助けを求めた。

「それは確かに気のせいさ。」

恐さがわかるんなら、あなた自身は変なんかじゃ無いよ。

そんな事言っちゃこの人悲しむぜ」

「この人？」

何故か少年は私の問いに暫く黙りこくった。

*

「安心して良いぜ。悪気はなさそうだ。」

でも、だとすると、僕があなたを助けてやるわけにはゆかねえな。」

少年が少し厳しい口を聞くと、私は暗闇の奥に見えない二つの瞳をはつきりと感じた。それらは、決してこちらを見ようとしなかった。

「だけど恐いんです。」

本当のところ、私はどうなってしまったんだろう？」

「よほど根性魂がしっかりしてきたな。」

僕のこんじょうを貸してやるから、自分を支えてみなよ」

少年が私の手に杖のようなものを渡したのでそれにすがり、私は自分を奮い、自身を立たせた。二つの瞳に向かって言い放った。

「あなたは、誰ですか？」

「私…私は」
その声を聞いて、私は思い出した。
電車の事故に遭った事を。最期の時に、千切れて飛んで来た彼女の首を。
その二つの瞳を。

*

気が付くと私は座席でうたた寝をうっていた。タタントンと一定の調子で揺れる車内に、うらかな陽光が差し込んでいた。向かいにはかわいらしい女性がうつむいたまま座っている。見つめていると目が合った。

「ごめんなさい」

彼女がはにかむのを見て、私は頬を掻いた。

ときおり汽笛が響いた。

【パートB】

少年の名は跋跳（バット）。春の黄昏時、人混みの影を縫うように現れる。電車に乗り込んだバットは、影や男や女のように、人でないものが座っているのを見つけた。彼は危険性を慎重に見定め、隣に腰かけた。

「あなた、憑かれているよ」

反応が無い。

「こつちの世界に迷い込んでしまったらしいぜ」

バットを認識したらしく、「それ」は首をこちらへ回した。

「何かおかしいというのはわかります」

頭が形を持った。持たない方が良かった。二つの頭が顔面を潰し合い、癒着（ゆちゃく）している。凄まじい力で衝突した跡が見て取れた。

「気が変になってしまったようです。」

何も見えないのに、恐ろしいものが見える気がしている」

体付きが男の形を取った。と、首から下が無い頭のざくろのよううなじが蠢き、断面から女の顔が振（よじ）り出た。さっと色を失い、瞳を伏せた顔は口を開ける形をしていなかったが。バットは両者の正気を確認した。
「それは確かに「気」のせいさ。」

恐さがわかるのなら、あなた自身は変なんかじゃ無いよ。

そんな事言っちゃこの人悲しむぜ」

「この人？」

バットは考える。彼は憑かれていない。彼女は彼に気づかれただけだ。顔面同士がくっついているのだ。一般女子なら恥ずかしくて悶え死ぬところである。

「安心して良いぜ。悪気はなさそうだ。」

でも、だとすると、僕があなたを助けてやるわけにはゆかねえな。」

言う間に女の瞳は覚悟を決めたようで、ざくろの中に引っ込んだ。

「だけど恐いんです。」

本当のところ、私はどうなってしまったんだろう？」

バットは身構える。となると、憑かれているのは彼女のほうか。彼と彼女を良くない状態に留めている妬み、恨みの集合体、「操者」共がいるはずだ。

「よほど根性魂がしっかりしてきたな。」

僕の魂杖を貸してやるから、自分を支えてみなよ」

杖を手渡すと、彼は何か見つけたように腰を上げ、虚空に向かって問いか

けた。

「あなたは、誰ですか？」

「私：私は」

彼女の決意に呼応して床面から体が現れた。彼女の体に絡みついて引きずり出てきた無数の手に、すかさず魂棒（こんぼう）を叩きつけるバット。

「裏で糸引く操者共、あまねく葬らん。抜刀術、操者一葬！」

操者の群れが吹っ飛び、鬼門に消えた。

「迷える参者はあるべき梵に帰せ！密刀術、参者梵退！」

二つの魂の昇天を見届けて、バットは鬼門の方角へ魂棒の先を向けた。

「やれやれ。電車事故の命日か：今日はまだまだ来そうだけ」

22 「死際の数式」

9F=11

【パートA】

事件編

T 大数学科の院生、工藤聡（くどうさとし）が大学構内で死亡した。死因は鋭利な刃物で腹部を刺された事による失血死。現場の状態から他殺の線が濃厚と思われた。

死体発見現場は、数学科ゼミの担当教授、沢二桑太郎（さわじそうたろ

う）の研究室。第一発見者は、沢二教授の娘の糸子（くめこ）だった。

発見時、工藤が倒れていた床には彼が書き遺したと思われる血文字が見つかっていることから、警察は容疑者の割り出しが容易であると判断し、事件の担当を辺留間啓子（へるまけいこ）と保安喫純一（ほあんかれじゅんいち）の二人に任せることにした。ぶっちゃけ、P5で人手不足なのだ。

「これがダイニングメッセージか」

「ダイニングメッセージですよ。ダイニングじゃ只のお買い物メモじゃありませんか」

すかさず訂正する保安喫に、辺留間は細かいなあ、と顔をしかめた。

床の上には被害者のものと思われる血痕で、『R』のような字と『I』（イコール）に似た記号、数字の『7』と思しき字、『X』、歪んだ『Z』かカタカナの『ユ』に見えるような字が横書きに並んでいる。『R』の左隣には縦に細長く拉げた『3』に似た模様も付いている。

「RRTXH……？ どういう意味だ？」

辺留間は首を傾げた。

「ユじゃなくて、Zじゃないですか？ 3R=7×Z」

「だとしても意味わからん」

動機とアリバイの有無から絞り込まれた容疑者は三人。

第一発見者の沢二糸子は、工藤に執心していたが、相手にされていなかった。

沢二教授は工藤の論文を盗用したとして、言い争う姿が何度か目撃されている。

工藤と同じ院生の有鹿十三（あるかじゅうぞう）は、恋人を寝取られた事を根に持ち、彼を目の敵にしていた。

「被害者はモテたのか」
 「イケメンで頭も良けりやモテるでしょう」
 「なるほど。イケメンでも頭空っぽの君とは大違いだな」
 女らしさの欠片もない辺留間には言われたくないと、保安噺は内心思った。

それにしても、と辺留間は続ける。

「何て書いてあるんだ？」

床の血文字に首を傾げる。

「何かの暗号ですかね？ 計算解くと誰かの名前とか」

「計算式……ねえ」

室内に置かれたホワイトボードを眺めていた辺留間は、不意に

「ノート借りてくる」

と、研究室を出て行った。残された保安噺が一人呟く。

「Zじゃなくて2かな？」

【パートB】

解決編

数時間経っても、刑事はやっぱり首を傾げていた。

「7×2だとしても、14。十三とは一つ違いか」

「もう死にそうって時にそんな暗号作るかねえ？」

あれこれと考える保安噺を横目に、工藤のノートを検分していた辺留間がのんびりと呟く。

容疑者三人には一人ずつ現場に立ち会わせてみたが、床の数式に関しては「こんな数式は見たことがない」と言うばかりだった。

「ところで保安噺お前、数字の7の左上のチョンって付けるか？」

唐突に辺留間が訊く。

「何ですか、チョンって」

「左上にちよつと出すだろ。片仮名のクみたいになさ」

「ああ、書きますね」

「あたしも書く。ところがこのノートの主は、書かない。しかし、床の『7』にはチョンがある。つまり、これは『7』じゃない」

彼女は床の文字を指差し、保安噺を見遣る。

「同様に縦長の『3』も数字じゃない。彼の3は丸っこい字だ。それに漢字の尺を彼はRみたいに書いている」

辺留間がノートを捲って指した先には、悪筆ながら担当教授の名前が記

してあった。『教授』と書かれていなければ、人の名前とは気づかないくらいだ。

保安噺が思わず、あつと声を上げる。そこには床の血文字と同じ文字。

「そう。3ではなくサンズイ、つまり3Rは『沢』。そして『』（イコール）は漢字の『二』。そう考えると7は片仮名の『ク』、『×（かける）』は『メ』、

『Z』は『ユ』若しくは『ヨ』」

「沢二……クメコ！」

すぐに沢二糸子を呼び出し、血文字の意味を説明すると、彼女はあっさ

りと犯行を認めた。

殺すつもりはなかったと、彼女は言った。

凶器のナイフは自ら用意し、付き合ってくれなければ無理心中をと、工

藤に迫ったところ、ナイフを取り上げようとする彼と揉み合いになり、誤って刺してしまったという話だった。その場は一旦逃げ出した彼女が、もう一度戻ってみると、工藤は既に事切れていたという。

凶器のナイフは糸子の供述通り、数理科棟の傍の側溝で見つかった。

早々に事件が解決できた事で、辺留間は上機嫌だ。

「ダイニングメッセージのお陰だな」

「ダ・イ・イ・ン・グ・です！」

「細かいなあ」

一々指摘する保安喫に、お前は小姑か、と顔を顰める辺留間。寧ろ、どうしてこの大雑把な彼女に血文字の謎が解けたのか、不思議に思う保安喫だった。

23 「交差点」

ちゃんどらー

【パートA】

～ 第一夜 ～

残業の憂さを少しでも晴らそうと、帰りの電車を不意に途中で降りた。

さつきまで激しく降っていた十二月の冷たい雨は、もう傘が要らないくらい弱まっている。駅前交差点の濡れたアスファルトに反射する青信号の点滅が、その先にあるショーウィンドーのライトと混じり合い、キラキラとまばゆい世界を造り出していた。疲れ果てた孤独な心を、わずかながら癒してくれる季節感に、俺は白い安堵のため息を吐いた。

通りの向こうに赤いドレス……。女のサンタクロースか。しかし両脇の松葉杖は似合わないな。その姿につい苦笑いをする。

信号が変わり足早に歩き出した人々に遅れて、痛々しいサンタクロースがゆっくと近づいて来た。

（違う！ 血……。なのか！？）

衣装と思込んでいたそれは、胸を中心に広がる血に染まった白いドレスらしく、裾と袖の先以外は、生々しく艶めいている。

（何なんだこれは？）

声をあげる事も出来ず周りを見渡すと、人々の警戒心剥き出しな視線が、彼女ではなく、立ち尽くす俺に注がれている事に気づいた。

（誰も気にしていない？）

（見えてないのか？……そういう事なのか？）

交差点の真ん中に突立つ俺を、しびれを切らしたクラクションが追い立てた。振り返った先の彼女は、俺に向かって微笑み、そして消えて行った。

明くる日の朝、眠る事が出来なかった俺は仕事をサボり、交差点を見下ろす二階の店でハンバーガーをかじっていた。今まで一度もオカルトな体験をした事はないが、不思議と怖さはない。驚きはしたが、むしろ興奮に

喜びを感じていた。

あの微笑みが何度も蘇る……。

今日も逢えないだろうか、期待に胸を焦がしながら彼女の面影を探している。

誰にも見えなかった。

俺にしか見えなかった。

存在しないはずの彼女の存在。

知っているのは俺だけかも知れない。

認める事が出来るのも、俺だけだ。

そうだ、クリスマスプレゼントを渡してみようか。

彼女への贈り物を探すのは、思いのほか心を弾ませた。

街で買いた物を済ませ、一度家に戻った俺は、沈み込むように眠りに落ちていった。

【パートB】

〈第二夜〉

昨夜と同時刻。来てくれる予感はある。包みを抱え、変わる信号をやり過ごしている内、気がつくとな彼女が通りの向こうに立っていた。

何処からかジョン・レノンの歌が微かに聞こえて来る。この時季になる

と、毎年思い出した様に流れる曲も、今夜は格別に輝いている。雪でも舞えば、この上ないシチュエーションだな。

昨日は確かに俺に微笑んでいた。彼女にも俺は見えているはずだ。

寒さを感じないほどに俺の体温は上昇していく。無性に喉が渇く。

車の流れが途切れ、気の早い奴が歩き始めた。俺が一步踏み出すと同時に彼女も動き出す。それは細いワイヤーで吊られたような不自然な動きにも見えたが、真っ直ぐ俺に近づいてくる。

手が届く距離に来た時、そっと包みを差し出した。

「その血、手当てしようか？」

彼女は一瞬、優しい笑顔を浮かべた。本当に穏やかで綺麗な表情だった。

(こんな笑顔、……初めて見たよ)

俺は確信していた。これが運命だと。が、次の瞬間、凍てつくような冷気が身体に重なりすり抜けて行く。

俺は全身を真っ赤に染め、差し出した手に持つ包みからは鮮血が滴っている。

目の前には顔をひきつらせたチンピラ風の男が、腰の引けた構えで立っていた。

「手当てって……、要るのはお前だろうが……」

振り返った先に彼女の姿は無く、数人のやじ馬が無言で俺を観察しているだけだった。

警官に取り上げられた包みには、何も入っていなかったらしい。俺の用

意したカラーバンデージは、無事彼女が受け取ったのだろう。気に入ってくれたらいいのだけれど。

〈 第三夜 〉

身体には何の異常も診られず、事件の報告も無い。タチの悪い悪戯の被害者として、俺は三日目で退院と同時に解放された。

俺の感情はおかしいだろうか。普通は恐怖を感じるものなのだろうか。いや、俺はまともだと思っている。彼女は美し過ぎるんだ。

その夜、もう一度逢う為に交差点で待つ俺は、予想を超える姿の彼女を見つめ唖然とする。

……車椅子。

俺が渡したグリーンの包帯を、マフラーの様にゆったりと首に巻いた彼女は、別の意味で痛い子に見えてしまった……。

あ、北風が寒い……。

f i n

24 「事件」

【パートA】

たぬ吉

「オウエウアウエウオウオウエウ」

突然胸から若い女性の歌声が聞こえてきた。娘の要望で設定した着メロだったが、かなり恥ずかしい。

「はい。杉下」

到着した現場で鑑識の米沢が溜息と共に声をかけて来た。

「最近の連続暴行殺人と同じ手口のようにですね。となると合同ですかね」

「本庁から大勢やってきますね」

相棒の神戸が挨拶ついでに答える。

また殺した。どうやら最近都内で続いている暴行殺人のようだった。

被害者は、近くに住む女子大生。今回も髪が長い。そして細紐で絞殺。

また首を絞められながら暴行を受け殺されたのだろう。

人通りの少ない暗い道、遺体は道の脇に植え込まれた木の根元。

これで3人目。どれも同じような状況だ。

しかも暴行を受けているのに、物証は毛の一本どころか、体液も採取出来なければ、足跡さえも残されていないらしい。

被害者が抵抗している形跡はあるのに、何も採取出来ない。

地元では始めてだが、本庁ではイライラが高じている。

マスコミには無能呼ばわりされているから、余計におかんむりだ。

3日前から都内での嚴重警備が施行されている最中の事件だけに、さぞカミナリの落ち具合も大きいだろう。

「それじゃ、聞き込みに行くぞ」
俺は神戸を連れ、近くのマンションに向かった。

被害者が通う学校や住居近くの変質者や前科者を洗っても、何も出て来ない。

テレビでは特集を組んで、警察の無能振りを非難しているばかりだったが、霊能力者とかいう輩が出て、今までの事件を予想していたと吹いていた。しかも次の事件まで予告しやがった。

もちろん、警察が黙っているはずがなかった。

一課の井上は、霊能力者と名乗る男、小田霧を取り調べる事になった。

小田霧という男は、剃髪していた。

「失礼ですが、髪の毛は？」

「ああ。これですか、霊能力の力を最大限に引き出す為に必要なんですよ。

体中の毛を剃ってますよ。ほら」

そう言った小田霧は、ズホンを捲り上げると、キレイに剃った足がによつきりと顔を出し、小田霧の屈託の無い笑顔とが相乗効果で、井上はムシヨウに腹立たしかった。

心証はクロだが、清水にはそれまでの事件のアリバイがあった。いづれも、東京にはいなかった。

これは、洗い直す必要があるな。井上は、今までの事件と小田霧の関係を調べ直した。

が、小田霧が自称しているように超能力でも持っていないければ、殺人事件を起こせない事が判っただけだった。

【パートB】

韓国女性グループの、明るいはちきれそうな歌声を止めると携帯電話を耳元へ持っていった。

「はい。杉下」

あざみと書かれたネームプレートのあるマンションの一室には、パソコンに続々と情報が集まってきていた。

テレビで予告した連続暴行殺人は、警察の厳重な警戒にも関わらず実行され、小田霧は一躍時の人となっていた。

「やはり、この小田霧とかいう男が犯人のようですね」

亀山がテレビを見ながら、杉下に告げた。

「証拠は上がったか？」

「いえ、まだです。なんでも超能力じゃないかなんて噂も出てるんですけどね」

「超能力？ 念力とかいうやつか？」

「ええ。笑っちゃいますよね」

杉下はじつと考え込んでいた。落ちそうになったたばこの灰を亀山がさつと灰皿で受けると、杉下はたばこを揉み消した。

「それじゃ、奴が超能力者だという証拠を探そうか」

「へっ？」

亀山が目を点にすると、杉下はニタリと笑った。

「杉下さん。証拠が出ました」

「亀山が杉下に報告する。」

「手品じゃねえのは確実だな？」

「はい」

「それじゃ、親父に報告するか」

その翌日、小田霧の死体が局部を切られて埠頭に浮かんでいるのが発見された。

警視庁第三課で、和久が新聞の記事に目を止めた。

小田霧が殺されてから、毎週起きていた連続暴行殺人が止まったのをきっかけに小田霧犯人説が、マスコミに取り上げられていた。

暴力団相手の仕事だから、一課の仕事には首を突っ込まないようにしていたが、被害者の名前を見て、気づいてしまったのだ。

マンションの入室をノックした和久は、杉下を呼び出した。

「探したぞ。あんな所で、何をやってるんだ？」

「ポランテアみたいなものですよ」

杉下は笑って答えた。

「二人目の被害者は、確か組長の姪だったよな？」

「あれ？ そうでしたか？」

「小田霧を殺したのは、おめえらじゃねえのか？」

「確実な証拠ってもんもないのに、警視庁の旦那が何を言ってるんすか。もつとも俺らにや、証拠なんていらねえんすけどね」

和久は、今回は大目に見るかと階段を降りた。

(あざみの花言葉って知ってますか？)

杉下が言った言葉を思い出し、後で調べてみるかと和久は思った。

全国任侠互助会、通称あざみ。

全国の暴力団がそれぞれの組の利害とは関係なく、全国の組関係の情報網を駆使し、依頼された仕事を請け負う。

その情報は警察内部の情報は無論の事、政府や財界だけでなく、地方の小さな商店まで含まれていた。

25 「シルバー・コスモ」

袖胡椒塩ラーメン

【パートA】

この者の名は、星野宇宙太。都会にてサラリーマンをして生活。彼女は、いない。しかし、これは仮の姿である。本当は地球人ではなく、遥か88万光年彼方の惑星カヤックから来たマヤックという。この者の実体は、地球を惑星カヤックの第三植民地とする為に、それらの環境調査とこれ以上に悪化しないように現状維持を保つように役目を背負って、この青い星へと長期間来訪していたのだ。

だが、忘れてはならないのは、地球を狙うのはカヤック星人だけではなく、ここ数年間ずっと、他の惑星の調査員と作業員たちがマヤックの邪魔をしたり、あろうことか地球の生き物たちや果ては地球人たちにも手を下し始めていて、裏ではやりたい放題である。

そうしてたまりかねたマヤックは、意を決して立ち上がった。この惑星は絶対に渡してなるものか。必ず我々、このカヤック星人の手中におさめてやる。——と。外部の連中に盗られないよう、ヤツらを徹底して排除してやる。

かといって目立ってしまったてはどうしようもなく、今までの星野宇宙太として勤務先で築き上げてきた信用を疑われてしまう。これまで人当たりが良すぎたのは、今から起こす実力行使にとつてこんなにも足枷になるうとは、マヤック自身は全くの予想外であった。

——だから。

そう、まずはこの仮の姿である星野宇宙太を見られてはならない。知られてもならない。よって、姿を隠せて、なおかつ堂々と仕事が出来る状態が一番ベスト。だが、これは大きな矛盾でもあった。どうする、星野宇宙太こと、調査員マヤック。

そして、何か閃いたのか、男はゆっくりと膝を伸ばして、押し入れへと向かって行った。

【パートB】

「ギャーッギャーッギャーッ」

「きゃーっ。助けて！」

夜8時過ぎ頃。都内路地で、顔が上下に長くその先端部が斧の如く前後に飛び出している異形の者が、うら若き娘の髪を掴んで闇の中にへと引きずり込もうかとしていたその時。

「お前の悪事もそこまでだ！」

「ギャーギャー？誰だ、貴様!？」

「俺か。俺の名は——」

闇を裂いて煌めき、シルバーとアイアンのツートンの装甲に身を包んで現れたこの者とは。

「地球は誰にも渡さない！この星は我々の物、俺の物！銀河系一番気高き戦士、シルバー・コスモだ!!」

大きく見栄を切って名乗りをあげて、すぐさまに面長の異形へと指差した。

「アヤヤン星人、お前はおそらくその娘さんを夕飯にするつもりだったが、そうはいかんぞ」

「ギャーギャー？貴様か、地球人を助けて回る英雄ってのは」

そうアヤヤン星人は左右に突出した蟹のような目をクリクリさせた。すると、シルバー・コスモが僅かながらの動揺を見せ言葉を返してゆく。

「何を莫迦げた事を！べ、べつに地球人なんかの為にこの星を守っているわけじゃないんだ！だいいち、俺は侵略者。だからこれは、助けて回っているのではない。この星の質を落とさない為の現状維持活動なだけだ！」

「ギャーギャー。小癩な！地球人は我々の飯だ」

「それが質を落としているというのだ。戯け者！許さん！」

「煩い。喰らえ、アヤヤンバブラー！」

「どうっ！」

射出された泡から身を捻って宙を舞い、装甲を月の光に煌めかせてゆく。

駆ける、天高く。

遥か高い夜空を裂く勢いで。

銀のシルエットを際立たせ。
敵を斬れ。輝く翼で舞い上がれ。

シルバー、シルバー。

銀河系一番の気高き侵略者。

宇宙の力を身に付けて戦え。

煌めく侵略の戦士。

シルバー・コスモ。

アヤヤン星人の練り出してくる数々の必殺の鉄を風のようにかわしてゆき、拳と踵をお見舞いしたのちに、相手が怯んだ一瞬の隙を見逃さず、シルバー・コスモは眩く輝く手刀を振り下ろした。すると忽ち面長の異形は縦に割けて、粒子となり消失。

「ありがとう、シルバー・コスモ」

「娘さん、夜道は気をつけるんだよ」

そう感謝された銀の男が、飛翔するなりに星の瞬く夜空へと消えていった。

そして、暗い部屋の隅。仮面と兜を脱いだシルバー・コスモの鏡に映ったその素顔とは、星野宇宙太ことマヤックだったのだ。

完結

26 「Life is...」

イエローサブマリン

【パートA】

「ダイオウイカ」

光差さぬ深海で、彼は息を潜めるように生きていた。

独りで生きることが定めと、盲目的に戒律を守る敬虔な信徒の如く、彼は今日も住処である岩の周りを漂っていた。

オレンジ色の大きな身体に大きな瞳を油断なく光らせ、身体の十倍はあろうかという長い腕を海流にたなびかせ、彼は何かを待っていた。それは食物であったかもしれない。魚であれ、甲殻類であれ、同族であれ、口に入るものなら何でも良かった、あるいは、かつて神の気まぐれで出会い、契りを交わした相手かもしれない。自分に近い大きさまで成長することのできた幸運なメス、彼女の面影を求めていたのかもしれない。はたまた、長く生き過ぎた己を断罪してくれるもの、二十メートルにも及ぶ身体さえ食す、海の覇者にして死神、鯨。そういったものを、彼は待っていたと思われる。

静かに時は流れていた。彼は食物連鎖の頂点に近い者としてそこに在り続けていた。その長い腕で絡め取った獲物を無心に食い続け、成長し続けていた。その海域において彼に敵う者はないなくなった。それでも彼は用心深く岩陰に潜む暮らしを続け、何かの答を求め続けていた。

ある日、音が聞こえた。

知っている気配が近くまでやってきていた。彼はそつと物陰から顔を出し、巨大な目でこちらを見た。——ああ、と彼は呟いた。その視線の先には若く、そして力強いオスのダイオウイカがいた。向こうはこちらに気付いている。否、こちらを指してやってきているのだ。

彼は蝕腕を伸ばした。強力な吸盤と、キチン質で作られた刃がその先端には備わっていた。鮫の背骨もへし折る悪夢の抱擁を、若いイカは巧みに水流を操ってかわした。こちらにできることは、あちらにもできる。同じように蝕腕が闇色の水を斬って迫ってくる。彼とて簡単にやられるわけはいかない。本能に従い、生きるための回避を行う。円運動が始まり、強い渦が生じては消えた。

俺はお前を知っている。お前は俺を知っているのか。

知っているのか。

——そうか……。

幾度目かのぶつかり合いがあり、互いを傷つけ合った腕が絡まりあう。そして鋭い嘴を深く突きたてて肉をむさぼったのは、若いイカのほうだった。

この世から消えて無くなっていく彼は、その灯火が消える最後の瞬間に悟った。これが答えであったか、と。これが定めか、と。

息子よ、という響きは深海の闇の底に、瞬く間に消えていった。

【パートB】

「ありふれた家族」

よく晴れた日曜の昼下がり、いっばいに枝を広げた広葉樹の下で、男は芝生に両脚を投げ出して座っていた。いささか眠そうに。そして視線の先にはよちよち歩きの息子と、転びそうになるたびに忙しく手を差し伸べる妻がいた。海浜公園の広場は思っていたよりも空いていて人もまばらで、柔らかな草の匂いに満ちていた。ずっと遠くから汽笛の音が聞こえ、頭上では軽いエンジン音を立ててセスナがゆっくり旋回している。海は陽光をはじいて静かにたゆたい、金色と碧の間で煌いていた。

「めえ、めえめ、めえめ！」

息子は先程から何かを追いかけている。しばらくして、それは緑色の小さなバッタだと知れた。まだ生まれて一歳と半、バッタはなかなか素早く近づけない。そして四歩か五歩あたりで勝手にバランスを崩して転がる。柔らかい芝生はそんな息子を弾ませるようにして受け止めてくれる。妻はその後ろを追いかけるようにして、もう、ちよつとは休もうよ、とかなんとか言いながらも結構楽しそうに笑っている。

「はい、捕まえたあ。もう終わりよ。ジュース飲もうね」

妻が息子を抱きかかえてこちらに歩いてくる。親子でカジュアルなスウェットにデニムという格好で。バッタはどうとう捕まえられなかったようだが、息子は気にすることもなく笑っている。髪と頬に芝の葉をつけて、頬を桃色に染めている。

「何？」

男の視線に、妻は少し困ったように笑う。物事をじっと見すぎるのは俺の悪い癖かもしれない、と男は自戒した。

「いや、なんでも。平和だな、としみじみ思ったんだ」

「……それを言い換えると、なんて言葉になるか知ってる？」

悪戯つぼく、妻が微笑む。

「なんて？」

「『幸せだな』っていうのよ。でしょ？」

バッグから息子にジュースを取り出してやりながら、妻は横目で男の顔を見やる。

「幸せだって、言っちゃっていいんだよ？ 隣に奥さんいて、家族があつて。休みの日にはこうしてゴロゴロできてさ。ダイオウイカや深海魚みたいに、切羽詰って生きなくていいってことよ。疲れたら疲れた、って言うって何もしなくても、いきなり大変なことにはならないし。もー、たまに水族館行ってビデオ観たからって、影響受けすぎー！ ねえ、お父ちゃん、変でちゅねー？」

笑う。妻が笑うのにつられて、息子も笑う。男はひどく照れくさく、その上で少し泣きそうになり、顔を背けたもののそれでもやっぱり笑った。

27 「浮気なんて、絶対許さない」

トマトマスカル

【パートA】

最近、妻の様子がおかしい。

どうもよそよそしいというか……

例えば、なにか話しかけても反応が鈍かったり、一瞬遅れて相づちをうつ

たり……

それだけではない。

以前よりも外出が多くなっている。

本人は、「友達の所へ行っている」とは言っているものの、そこに外泊までチラホラするようになっては、内心穏やかではいられない。

さらに加えて、近頃、妙に僕の行動やその時間を知らうとするのだ。

まるで、僕が知ることの出来ない、空白の時間を作り出そうとでもいうように。

——もしや浮気ではないだろうか？

不安が頭をよぎる。

そして、一度膨らんだ闇は、瞬間に抑えきれない大きさになる。

僕は二週間をかけ、妻の不審な行動を慎重に探り、あとになってこう後悔した。

——知らないほうが幸せだったかもしれない……

妻の目が届いていないのを見計らって、隣の老夫婦に最近の妻について伺ってみた。

すると、決まって昼頃から出かけるのを目にする……とのことだった。

そして二時間ほどして帰ってくるらしい。

僕は夫妻に、「家内には内密にしてください」と強く釘を刺し、自室に入っ

てからやっと、増した懸念と不安を表情に出した。

絶対にバレないようにして、妻の携帯電話も調べた。特に目についたのは、二つの通話記録だった。

北村輝代――

妻の高校時代からの友人だ。

僕も何度か会ったことがある。

山瀬浩一郎――

……僕の知らない人物だ。

もしかや相手の……

ここまで来て、僕の我慢も遂に限界に達した。気になって何も手に付かない日々が続く。

僕は意を決して、妻にこう切り出した。

「……少し話があるんだけど、いいかな？」

【パートB】

最近、夫の様子がおかしい。

どうやら、私の一日の行動を嗅ぎまわっているみたいだ。

――もしかや、“アレ”に感づかれたのだろうか？不安が頭をよぎる。

露見してはまずい。でも、下手に突くこともできない。

そうやって悶々とした日々が過ぎたある日、とうとう夫から声がかかった。

「……少し話があるんだけど、いいかな？」

「……ええ、ちょうど私も……あなたに言わないといけないことがあるの。」

まずは、夫のほうからおずおずと口火を切る。

「君は最近……なにかあったのかい？」
内心ドキリ。

「なんのこと？」

「ほら！ やけに出かけることが多いからさ！」
どこまでバレているのだろうか？

懸命に、冷静さのみを顔にする。

「友達の――輝代の所に行ってるの。話したでしょう？」
しかしそれでも、夫の疑念は晴れないようだった。

「……悪いとは思ったんだけど、ケータイの履歴も見せてもらった。」

私は反射的に自分の携帯電話に視線を奪われる。

あまりに迂闊であったと、遅い後悔。

「……北村さんとは、今でもよく話をしてるみたいだね。」

「当然でしょ？ 輝代は高校からの親友だもの。」

「山瀬浩一郎。」

彼は、短く、冷たく、言い放った。

「誰だい？」

・
・
・

「弁護士よ。」

私の返答に、夫は一瞬マヌケな表情になる。

「弁護士？」

オーム返しになる夫。

「あなたも、最近ずいぶん帰りが遅いわね。」

私が言った瞬間、彼の肩がピクリと跳ねたのを見逃さない。

「それは！ 部長に飲みを誘われたからで……」

何も言わないので、彼はひとつ安堵のため息。

「総務課の佐々木さん、いつの間に部長になったのかしら。」

一気に反転。

彼の体は先にも増して大きく跳ね上がった。

「入社してまだ2年目のOLが部長だなんて、ずいぶん変わった会社ね。」

「な……！ な……！」

夫は顔を蒼白にし、陸にあがった魚のように、口をパクパクさせた。

私は懐から数枚の写真を出す。

「あなたがその佐々木“部長”さんと一緒に“飲み屋”に入る瞬間も撮ってありますし——」

それには、2人が“大人の宿泊所”へ入る様子がはっきりと写っていた。

「山瀬弁護士からの助言も得ています。……もちろん慰謝料の話もね。」

夫の脂汗。辛そうな呼吸音。歪んだ顔。今はそれら全てが不快だ。

「これに——」

私は、用意しておいた離婚届を叩きつけた。

「判をつけてくれるかしら？ もちろん嫌とは言わせないけど。」

最後に、とどめの一言。

「浮気なんて、絶対に許さないんだから。」

—
以上、
27
作品。

(完)